

夏休みに読んでおきたい 本のリスト

麻布学園 図書館部

2013年度

目次

国 語	-----	1
英 語	-----	10
数 学	-----	14
社 会	日本史 -----	18
	世界史 -----	21
	地理 -----	27
	公民・政経・倫理 -----	33
理 科	生物 -----	39
	物理 -----	42
	化学 -----	47
	地学 -----	49
	科学一般 -----	57
情 報	-----	61
芸 術	美術 -----	65
	書道 -----	66
	音楽 -----	68
技 術	-----	73
家 庭	-----	75
体 育	-----	76

国 語

< 中 学 >

◇『雁』 森 鷗外 新潮文庫

お玉は、毎日自分の家の前を通る医科大学生岡田に思いを寄せるが、結局二人は結ばれずに終る。難解なものが多い鷗外の小説の中で最も読みやすいものの一つである。

◇『藤村詩抄』 島崎藤村 岩波文庫

日本の近代詩に初めて芸術的香気を吹き込んだ島崎藤村の四つの詩集、すなわち、『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』をまとめて一冊に編集し直した清新な名詩集。「初恋」「千曲川旅情の歌」「椰子の実」など数多くの著名な詩が収められていて、もはや必読の古典ともいえる。近代詩成立の過程も窺えて楽しい。

◇『大津順吉・和解・或る男・其姉の死』 志賀直哉 岩波文庫

志賀直哉の初期の文学は、父直温との「不和」がその基調となっている。そのような「不和」の歴史を、「大津順吉」という主人公に仮託して書かれたのが『大津順吉』であり、その後の「和解」の喜びを一気呵成に作品化したのが『和解』である。そして、この間の経緯を「大津順吉」という主人公ではなく、「弟」という人物を創造し、その眼から客観的に見つめ直して書かれた『或る男・其姉の死』。これらの作品連はその意味では父との「不和」に関する三部作であり、『暗夜行路』と並ぶ、志賀直哉の代表作である。

◇『地獄変』 芥川龍之介 岩波文庫

短編小説の名手、芥川龍之介の“王朝もの”の代表作「地獄変」。地獄変の屏風を描くため、異常な芸術的執念を燃やす天才絵師の姿を描く。その他、古典文学に取材しながら、芥川の持つ近代的視点から描かれた秀作が収められた短編小説集

◇『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治 角川、新潮、ちくま文庫

孤獨な少年ジョバンニは、夢の中でカムパネルラとともに宇宙空間を走る銀河鉄道に乗車する。旅先や車中でのさまざまな出会い。最後にジョバンニはこう語る。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸いのためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」。しかし、ジョバンニの心にはいつまでも疑問が残った。「けれども、ほんとうの幸いは一体何だろう」。どこまでも一緒に行こうと誓ったカムパネルラはジョバンニを残して車中から消えてしまう。夢から覚めたジョバンニを待っていたのは、カムパネル

ラが友人を助けようとして水死したという報せだった。なお、岩波文庫版は旧版で、ここには新版では削除されたブルカニロ博士という興味深いキャラクターが登場する。こちらの一読もすすめる。

◇『君たちはどう生きるか』 吉野源三郎 岩波文庫

コペル君と博士の文通を通して描かれる少年の精神的成長のプロセス。生きていくうえで、誰もが気になる問題や疑問について語る二人の言葉から、『人生をいかに生きるべきか』という誰もが抱える問いを解くためのヒントがかいまみえる。

◇『榆家の人びと』 北杜夫 新潮文庫

初代が作りあげた七つの塔そびえたつ青山の病院、その第一次世界大戦後に始まる小説。私立としてはあまり類のない発展をとげ、大勢の人々をかかえた病院も、第二次世界大戦末期には……。戦後までの三代数十年にわたる様々な人間模様—その中には麻布生も登場するが—それらはそれぞれの時代の気分をも実によく伝えている。

◇『点と線』 松本清張 新潮社

一見ありふれた心中事件に隠された奸計！列車時刻表を駆使してリアリスティックなアリバイを設定し、推理小説界に新風を送った秀作。「社会派」推理小説の大家と言われる松本清張の描くスリリングな展開は、現代の読者を魅了するだろう。

◇『冥途・旅順入城式』 内田百閒 岩波文庫

寿命は三日きりだが、その間に未来の凶福を占う予言を遺すという、半牛半人の怪物に転生してしまった男の独白「件」、狐が子連れに女に化けるのを確かに見たと主張する男が、自分の言葉に確信を持ってなくなっていく様を描く「短夜」など、〈夢〉の印象を書き付けたかのような幻想的文体で人間関係への怖れや孤独感を映し出す。芥川龍之介をして「同氏を訪うて作品を乞ふものなき乎」と推薦せしめた、異色の作家の短編集二巻を収録。

◇『狂人日記・阿Q正伝』 魯迅 岩波文庫

1911年の辛亥革命に始まる近代中国の革命の歴史は、儒教的封建思想と民主主義思想との闘いの歴史でもあった。魯迅は中国の民主化を目指し、封建勢力と果敢に闘った小説家であり、思想家であった。初期に発表されたこの二つの小説は、中国国民への覚醒を促す魯迅の心の叫びと言える。

◇『変身』 フランツ・カフカ 新潮文庫

ある朝、目をさますと巨大な青虫に変身した自分を発見するザムザ。それをきっかけにして起こる家族の崩壊から再建への過程を、自己存在を凝視しつつ死に至るザムザの意識

を通して描いた必読の名作。

◇『日本語の年輪』 大野 晋 新潮文庫 M2～

言葉というのは人間のものの考え方を決定する大きな力を持っている。(たとえば元々「美」という漢字が大きい羊を表すのに対し、日本の「うつくし」は小さい者への愛情を表しており、少なからず両国の美意識に影響している。) 国語学者であり、語源推定の名人芸で知られる著者が、テーマ毎に単語を取り上げ、日本語の裏に張り付いた日本人のものの見方を明らかにする。古文単語の語源説明が好きな人は楽しめること間違いなし。

◇『文車日記』 田辺聖子 新潮文庫 M2～

源氏物語の現代語訳も手がける著者が、丁寧かつ愛情たっぷりに古典作品を紹介してくれる。平易な文章の中にも、女の視点から本質を突く鋭い読みが隠れており、文学作品として古文を捉え返す良い契機になるだろう。文法に飽き飽きしている人はこの本から古典の世界に入ることを勧めたい。

< 高校 >

◇『平家物語』 石母田正 岩波新書

『平家物語』と呼ばれる作品の本質を余すところなく的確に論じた作品論であると同時に作品の入門書・導入書となっている書である。作者石母田は主に中世を専攻する歴史学者であるが、「この時期の歴史を平家物語とは別箇に調べながらも、いつもこの物語が念頭にあってはなれないのである。これは歴史の研究が未熟なせいもあるうけれども、主として平家物語のもつ文学の力のせいであろう」「平家物語を独立の物語＝文学として正しく理解する努力を自分でやってみてはじめて、歴史の研究者は平家の力から解放され、平家物語を全体として歴史研究のなかに生かすことができよう」との考えからまとめられた。1957年の作であるが、鋭い指摘・読みは現在の平家物語研究の基礎としてなお光を放っている好論である。

◇『福翁自伝』 福澤諭吉 岩波文庫

著書の『学問のすすめ』などにより、明治初年代の知識人たちに日本の近代化への指針を与えた福澤諭吉が、晩年自らの生涯を振り返り口述筆記させたもの。維新前夜の時代の雰囲気や自らの生い立ちが軽快な語り口によって再現され、諭吉をより身近に感じさせてくれる好著。付記される注も適切であり、本文を更に読みやすくするのに役立っている。

◇『武蔵野』 国木田独歩 新潮文庫

国木田独歩は自然を愛した作家といわれる。ではなぜ彼は自然を愛したのか？ それは社会に自足して生きている人々を批判するためである。人間は社会の中での勝ち負けがす

べてだと思っているが、実は社会を包み込むより大きな世界として自然がある。社会の中でどんなに偉い人々もこの自然の中で見れば実にちっぽけな存在にすぎない。独歩はこのような観点から、人間の社会的評価を相対化した。彼が「小民」と呼ばれる名も無き人々を彼の小説の主人公としたのはそのためである。では社会を離れて人間は生きることができるのか？ 実はそれが不可能であることを彼ほどよく知っていた人間はいない。それはこの短編集に収められた『源叔父』を読めばよく分かる。彼の作品はこの「不可能性への投企」としてのロマンティズムにおいて、今なお私たちの胸を打つ。

◇『破戒』 島崎藤村 岩波文庫

明治39年に発表され、空前の反響を呼び起こした自然主義文学の嚆矢ともいべき島崎藤村の代表的小説。被差別部落に生まれたがゆえに理不尽な差別に悩まされてきた青年教師・瀬川丑松が、父の戒めによって隠し通してきた出自を、教え子たちに告白するまでの心の葛藤を描く。今なお続く差別の過酷さを告白して衝撃的だ。

◇『夜明け前』 島崎藤村 岩波文庫

「木曾路はすべて山の中である」という冒頭でも名高い島崎藤村の晩年を飾る名作。江戸から明治へと移り変わりつつある激動期、中山道の宿場・馬籠の名家に生を受けた青山半蔵の愚直で悲しいまでのひたむきな生涯を、木曾の雄大な自然を背景に生き生きと描き出す。近代小説屈指の大作で、日本の近代のあり方を問いかける。

◇『それから』 夏目漱石 岩波、角川、新潮文庫

実業家の父を持つ次男坊の代助は、(東京) 大学を卒業後、定職にも就かず、結婚もせず、その父から生活費を調達してもらいながら一家を構える、いわゆる「高等遊民」であった。何事に対しても真剣に取り組めない代助は、その理由を自らの恵まれた境遇と能力とに帰していたが、実家の要請する(経済上の理由にも基づく)縁談を断り続けるうちに、自分の中の秘めた思いに気づき出す。それは、大学時代、親友の小林との仲を取り持った三千代への変わらぬ思慕であった。その小林夫妻の帰京、産・官を巻き込む大規模な汚職の表面化、父との関係の悪化など、代助をとりまく状況が激変し始めるなか、彼が自らに迫った決断とは……。明治末期の社会情勢を織り込みつつ、近代知識人たる一青年の在り様を象徴的に描いた小説。

◇『道草』 夏目漱石 岩波文庫

生活の安定している健三の家のもとに、かつての養父が金を無心しに来る。それをきっかけとして、健三は幼児体験を中心に、現在の自分に至るまでの様々な出来事を思い出す。また、妻である「住」とのぎくしゃくした日常そのものを淡々と見つめ直していく。肉親・親族という血縁を軸に、関係性そのものに焦点を当てた、漱石による自伝という色合

いも漂う小説。

◇『直筆で読む「坊ちゃん」』 夏目漱石 集英社新書 ヴィジュアル版

誰もがよく知っている『坊ちゃん』の直筆原稿を、写真版で完全収録したもので、活字版からはこぼれ落ちてしまった様々なもの（書き手の息遣い、置かれていた人間関係…）が伝わってくる。例えば、有名な松山の「なもし」言葉（坊ちゃんと下宿の御婆さんの会話を思い出してみよう）。これは、東京出身の漱石には正確に表現できなかつたらしく、原稿には高浜虚子によるネイティブチェックがはっきりと入っているのだ。こんな発見をしながら、名作を味わってみるのも楽しい。

◇『高野聖』 泉鏡花 岩波・新潮文庫

飛驒の山奥、旅僧は道に迷った薬売りを救おうと後を追う。山蛭や蛇の棲む山路をやつと切り抜けて辿り着いた峠の一軒家で、匂うばかりの美女に一夜の宿りを許され、もてなしを受ける。実はその美女は、淫心を抱いて近づく男たちを動物に変えてしまう妖怪だった。そして、彼女の哀しい過去が明らかになる……。

明治・大正・昭和を通じて、美しく妖しい独自の幻想世界を構築した泉鏡花の名作。

◇『暗夜行路』 志賀直哉 岩波文庫

時任謙作が六歳の時、母が死去し、その二ヶ月後の或る夕方、一人の見知らぬ老人が現れる。その場面からこの物語は始まる。その後我の強い青年として成長した謙作は、自らの出生の秘密、その老人—祖父と母との関係を知らされ、大きな衝撃を受ける。そしてその状態から脱け出すべく必死の努力を重ねた結果、一人の女性を妻とすることによって、光明を見出したのも束の間、今度はその妻の不義によって再び打ちのめされる。このように、祖父の出現以来、ひたすら「暗夜」を彷徨し続けた謙作は、ついには鳥取の大山で「夜明け」を迎えることとなる。短篇作家として知られる志賀直哉が、明治44年から昭和12年までの、実に26年の歳月をかけて完成した唯一の長篇小説であり、日本近代文学の一つの記念碑とも言うべき作品である。

◇『走れメロス』 太宰治 新潮文庫

安定した実生活のもとで多彩な芸術的開花を示した中期の代表的短編集。「富士には、月見草がよく似合う」とある一節によって有名な『富岳百景』、著者が得意とした女性の独白体の形式による傑作『女生徒』、10年間の東京生活を回顧した『東京八景』ほか、『駆込み訴え』『ダス・ゲマイネ』など全9編を収める。太宰治とえば『人間失格』のイメージしかない人にぜひとも読んでもらいたい。書物にはそれぞれ出会うべき時期というものが存在するが、この本はまさに君たちの年齢でこそ出会うべき一冊である。

◇『金閣寺』 三島由紀夫 新潮文庫

昭和二十五年の金閣寺放火事件を材にとった小説。犯人である学僧の苦悩を、告白体で綴った三島の代表作。この事件は、映画「炎上」、水上勉の小説「金閣炎上」としても描かれており、世人の耳目を驚かせた大事件であった。

◇『方丈記私記』 堀田善衛 筑摩書房

太平洋戦争、人呼んで大東亜戦争、呼称に込められたそれぞれの位置づけ・思いはともかくも、空前の混乱期を経験したひとりの人間が自分の生を検証する方策として、数百年以前の日本歴史上稀にみる混乱・転換期の産物である『方丈記』を中心に据え、同時代の記録・文学作品を的確に参照しながら、作者桑門の蓮胤（＝鴨長明）の生を真摯に追求した書である。その作者の努力は、中世と現代という時間的距離・落差を物ともせず、混乱期における確とした生のありようの一つを見事に跡づけた。古今東西人間の本質・営みは変わらないはずである。カオスの時代といわれて久しい現在であるだけに、自らの生を考える上で様々なことを示唆してくれるに違いない。

◇『出発は遂に訪れず』 島尾敏雄 中公文庫

加計呂麻島春之浦は特攻艇（魚雷を抱えて敵戦艦に突っ込む海の特攻隊）の基地である。海軍少尉の《私》はその特攻部隊の隊長である。終戦間際の8月13日、ついに恐れつつも待ち望んだ特攻の命令が下された。「心にも体にも死装束をまとった」まま発進の合図を待つが、死を前にした緊張のままとうとう15日を迎え、敗戦を知らされる。この作品は、死を前にした宙吊りという一種の極限状況における青年将校の心の内側を描くことで、戦争が人間にもたらす過酷な一面を見事にとらえている。

◇『地の群れ』 井上光晴 角川文庫

『全身小説家』という映画がある。作家井上光晴という存在への接近を試みたドキュメンタリーだが、彼はこの映画の撮影中、病気（肝臓ガン）が悪化し、不帰の人となる。映画は期せずして作家の死の記録となってしまったのである。映画の中で彼は「嘘つきミッチちゃん」と呼ばれ作品世界だけでなく自分の現実すら虚構化するかのごとくであり、そのありようはまさに「全身小説家」と呼ぶにふさわしく、非常に興味深い。この作品は長崎の被爆者の部落を中心にし、戦後日本における、虐げられたもの同士が互いに傷つけあう悲惨な人間のありようを描いたものである。

◇『沈黙』 遠藤周作 新潮文庫

江戸時代のキリスト教弾圧の中で殉教を遂げる信者達。彼らと自らの師を救おうと日本に潜入したにもかかわらず、信者の裏切りによって捕縛され、棄教を迫られるポルトガル人司祭。神の存在、東洋と西洋の思想の断絶などを鋭く描いた問題作。

◇『猫を抱いて象と泳ぐ』 小川洋子 文藝春秋

唇が閉じたまま生まれ、切開手術を受けた後も寡黙に育った少年が主人公。体が大きくなりすぎて屋上動物園で生涯を終えた象と、壁の隙間にはまって出られなくなった女の子を架空の友人として生きていた彼は、チェスで素晴らしい才能を発揮する。ところが師匠が太りすぎて命を落とすと、彼にとって大きくなることは恐怖となり、自らの意志で体の成長を止めてしまう。そしてからくり人形の中に入ってチェスをするようになった彼は、美しい詩のような棋譜を次々と残すが……。

病や奇形など、通常は治療や矯正の対象と見なされてしまうようなものに美的な価値を見出してゆき、既成の価値観を優しく転倒させる、哀切でありながら暖かい愛に満ちた物語。

◇『古文の読解』 小西甚一 ちくま学芸文庫

「伝説の参考書」(帯より)の復刊である。はっきり言って内容的に超高校生級のこの本を君たちに読んでほしいのは、とかく機械的な勉強になりがちな受験勉強という枠組みを超えて、一流研究者の古典講義を楽しんでもらいたいからである。己の無知を恥じつつ、虚心坦懐にこの本を読み進められれば、受験古文など朝飯前だろう。

◇『漢文の素養』 加藤 徹 光文社新書

麻布では、中三～高二まで漢文が必修である。しかし、何のために漢文を学ぶのか、それについて完全に納得した上で学んでいる諸君はそう多くはないであろう。本書には、その答えが書かれている。麻布生諸君がその答えで納得するかどうか、それは分からない。だが、一度は本書を手にとって、漢文を学ぶ意義、もっといえば、日本人にとっての漢文の重みというものを考えてみて欲しい。

◇『孔子』 貝塚茂樹 岩波新書

孔子が様々な機会に色々な人々に語った言葉をしるした『論語』ほど、長い時代にわたって影響を与え続けたものはないであろう。しかし、孔子の生きていた時代と社会はどのようなものであり、孔子の発言はその時どのような意味を持っていたのかとなると、不思議なことに私達はほとんど知らない。本書は、そういうことを知りたい人のために書かれたものである。

なお、孔子については他に、和辻哲郎の『孔子』(岩波文庫)があり、西洋流の方法論で『論語』を読めばどうなるかというすぐれた論考が、知的興奮を呼び起こすだろう。さらに興味を持った人は、白川静『孔子伝』(中公文庫)を読めば、圧倒されるだろう。それは何よりも作者自身の全存在をかけて書かれたものであり、その内容の感動的であることは、近年まれなものである。

◇『史記列伝』全五巻 小川環樹他訳 岩波文庫

漢の司馬遷が著した歴史書『史記』は本紀・表・書・世家・列伝の五部から構成されているが、有名無名の個人の伝記を集めた列伝が読み物として最も面白い。本書はその列伝の口語訳である。ともすれば歴史に埋没しがちな個人が生き生きと描かれている。

◇『司馬遷一史記の世界』 武田泰淳 講談社文庫

「司馬遷は生き恥さらした男である」と作者は語り始める。匈奴の捕虜となった将軍・李陵を弁護したために、漢の武帝から宮刑というおぞましい刑罰を受けることになってしまった後、司馬遷はただひたすら『史記』を書き続けた。司馬遷を駆り立てたものは何であったのか。世界は人間群像からなり、歴史は運動であるよりもむしろ持続である。作者は『史記』をこう解釈する。昭和17年に発表されたこの評論が今もなお読むに耐えうるのは、作者が、個と世界との対峙という宿命を、司馬遷同様、屈辱と苦しみの中で突き詰めたからであろう。中島敦の小説『李陵』と併せ読むことをすすめる。

◇『小説十八史略』全6巻 陳舜臣 講談社文庫

中国には歴代王朝の興亡を記録した歴史書がよく整備されて残っている。これらの歴史書の記録をもとにして、伝説の時代から十三世紀末の南宋の滅亡まで、人々がいかに歴史の流れの中で生きたのか、ということをも小説としてまとめたのがこの本だ。歴史の英雄や豪傑の活躍や悲劇が生き生きと描かれている。

◇『中国思想史』(上・下) 森三樹三郎 第三文明社レグルス文庫

数多い中国思想史概説書の中で、わかりやすさとおもしろさにおいて一頭地を抜いている。本書の特徴は仏教や道教という宗教の方面にも目配りが行き届いている点である。本書を一読することによって漢文や中国文化に対する理解が一段と深まるであろう。

◇『罪と罰』 ドストエフスキー 工藤精一郎訳 新潮文庫

文学が輝いていた時代の、代表的作品の一つであり、君達の父親の世代の誰もが少なくとも読まねばならないと一度は思ったことのある作品である。話は、貧乏ゆえに途中で大学をやめざるを得なかったラスコリニコフが、ある思想的な確信のもとに、生きるに値しないと考えた金貸しの老婆をオノで殺すところから始まる。が、不幸なことに運悪く部屋に入ってきた善良な老婆の妹までも殺してしまう。以下「思想的な確信」とは裏腹に精神も行動も様々に振幅する過程を克明に描いたものである。ともかく、夏休みの一週間、集中して読みきることである。そうしないと登場人物の名前が混乱して、意欲をそがれる。そして、一気に読み切ると、大変面白いことだけは保証する。

◇『異邦人』 アルベール・カミュ（窪田啓作訳） 新潮文庫

「きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から電報をもらった。『ハハウエノシライタム、マイソウアス』これでは何もわからない。恐らく昨日だったのだろう。」

『異邦人』の著名な冒頭である。歯切れのよい短かな文が、次々に連らねられ、主人公（ムルソー）の生き方が一文ごとに浮かびあがってくる。すなわち、「ママン」と母を呼ぶ母子の関係。これは、成人した男が、母を「ママ」と呼ぶようなものだ。その母が死んだ。しかも、その死が「昨日かも知れないが、私にはわからない」という異常な状況。次の文で「養老院」に入っていることが知れる。読者は、「ママン」を養老院に入れざるを得なかった事情ないしは立場をあこれ頭に描く。「ママン」と「養老院」は、しっくりしない。しかも、それを語るムルソーの語り口から、通常、ママンと呼ぶ母親の死を知ったときの男の動転した涙を少しもうかがえない「さめた目」を感じるのである。この見事な冒頭の数センテンスが、以後の、ムルソーの殺人への必然的な流れとなり、発表された当時の読者に、圧倒的に受け入れられた理由ともなっている。

母の死と、その葬儀に見せたムルソーの様々な対応、またそれに続く日常、それは当時の人々にとって、多少は、気になる生き方であったにしても、「事件」さえ起こらなかったならば、「非難」されなかったにちがいない。そのムルソーの、ある意味では、やくざ者にすらみせた「誠実」な思いやり等が、裁判を通して、断罪されていくのである。

法廷で、ピストルを撃った理由を、ギラギラ照りつけて、意識をもうろうとさせた「太陽のせいだ」というセリフのみが有名になり、一人歩きをしているが、この、サルトルと並び称され、小説は、わずか『ペスト』とこの二作だけを残し、ノーベル文学賞を受賞し、交通事故死するカミュの「衝撃」的な処女作を、是非、一読してもらいたい。小説というものが、袋小路に来ている現代、文学もまだまだ立派な「表現」であるということに気づくであろう。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
銀の匙	中 勘 助	岩 波 文 庫	M
野菊の墓	伊 藤 左 千 夫	〃	〃
遠野物語・山の人生	柳 田 国 男	〃	〃
青べか物語	山 本 周 五 郎	新 潮 文 庫	〃
潮 騒	三 島 由 紀 夫	〃	〃
敦 煌	井 上 靖	〃	〃
幼年時代・あにいもうと	室 生 犀 星	〃	〃
浮 雲	二 葉 亭 四 迷	〃	〃
忍ぶ川	三 浦 哲 郎	〃	〃

書名	編著者	発行者	学年
雲の慕標	阿川弘之	新潮文庫	M
友情	武者小路実篤	〃	〃
若い詩人の肖像	伊藤整	講談社文芸文庫	〃
ゲド戦記	ル・グウィン	岩波少年文庫	〃
人間の歴史	イリソ	〃	〃
ジャン・クリストフ	ロマン・ロラン	岩波文庫	〃
若きウェルテルの悩み	ゲーテ	〃	〃
はてしない物語	M・エンデ	岩波書店	〃
ツバメ号とアマゾン号	アーサー・ランサム	岩波書店	〃
十五少年漂流記	ジュール・ベルヌ	新潮文庫	〃
モルグ街の殺人事件	アラン・ポー	〃	〃
赤い子馬	スタインベック	〃	〃
車輪の下	ヘッセ	〃	〃
狭き門	ジッポ	〃	〃
老人と海	ヘミングウェイ	〃	〃
アドルフ	コンスタン	〃	〃
村の家・おじさんの話・歌のわかれ	中野重治	講談社文芸文庫	H
五重塔	幸田露伴	岩波文庫	〃
迷路	野上弥生子	〃	〃
風土	和辻哲郎	〃	〃
蟹工船・党生活者	小林多喜二	新潮文庫	〃
死者の奢り・飼育	大江健三郎	〃	〃
悲の器	高橋和巳	〃	〃
細雪	谷崎潤一郎	〃	〃
梶井基次郎全集(全1巻)	梶井基次郎	筑摩文庫	〃
日本の思想	丸山真男	岩波新書	〃
父と子	ツルゲーネフ	岩波文庫	〃

英語

◇『焼かれた魚』 小熊秀雄 透土社 M～H

和英対訳の短い童話である。0. ワイルドの「幸福の王子」を思い出させる、大人にも読んでもらいたい短編。英語は高校生なら十分判るはずです。

◇ 『Frindle』 Andrew Clements Aladdin Paperbacks M3～

いたずら好きな小学生のニックは、英語の授業でグレインジャー先生に単語の成り立ちを習ったことをきっかけに、自分で単語を作ることを思いつく。ペンのことを「フリンドル」と呼び始めたニックを、辞書至上主義者のグレインジャー先生は叱るが、クラスの仲間は面白がり、みんなペンのことを「フリンドル」と呼び始める。伝統を守ろうとするグレインジャー先生の必死の抵抗にもかかわらず、「フリンドル」現象は町を越えて広がっていった。

私(村上)が最近読んだ中で一番感動した本。エネルギーに溢れた生徒と、素晴らしい教師の交流を描いた物語。使われている単語は比較的易しく、ページ数も少ない。生徒諸君が初めて読む英語の本として格好だと思う。

◇ 『New Yorkers (Short Stories)』

O. Henry Oxford University Press M3～

今年最初の実力試験(高1)では、この短編集の中の一編(Soapy's Choice)を出題した。O.ヘンリーの原文は相当難しいが、このシリーズは使用語彙を700語に絞って書き直している。中3生でも十分対応できる文章だろう。しかし単語が易しいにもかかわらず高1生の点数は悪かった。「易しめの英文を沢山読む」という訓練が不十分だったのだろう。このような訓練は英文を(日本語に置き換えずに)そのまま理解して読み進んでいくためには不可欠である。その意味では高学年の生徒が読んでもためになるだろう。なにより内容が面白い。英語の読書の入門編としておすすめする。

◇ 『The Old Man and the Sea』(老人と海) E. Hemingway 南雲堂 H2～

何ヶ月も魚の取れなかった老いた漁師は、ある日巨大なカジキマグロを引っかける。背中に糸をまわし、カジキと何日も格闘し、ついにボートの脇に浮き上がらせるが、老人のカジキを狙ってサメが集まってくる。

◇ 『The Catcher in the Rye』(ライ麦畑で捕まえて)

J. D. Salinger Penguin Books H2～

主人公は「落ちこぼれ」の高校生で、限り無く「放校処分」に近い状況にある。何かを求めて夜の街をうろついたり、気の合いそうな先生の家を訪れてみたりするが、その少年が最後に見つけたものは……。

◇ 『Animal Farm』(動物農場) George Orwell 英潮社 H2～

ある農場の動物達が「革命」を起こして農場主を追放し、動物だけの国を作る。彼等は互いに「同志」と呼び合い、スローガンは「平等」。ところが、ある動物は他の動物よりもっと平等である、などとわけの分からないことを言い出す連中が出てくる。こつこつと

真面目に働く馬の末路があわれである。

◇ 『Huckleberry Finn』 (ハックルベリー・フィン) Mark Twain 研究社 H2～

ディズニー・ランドで、いかだに乗ってトムソーヤの島に行った人は多いと思う。あのいかだにはエンジンがついているが、ハックルベリー・フィンが逃亡奴隷のジムと一緒にミシシッピー川を下ったいかだにはエンジンはついていなかった。孤児のハックと黒人のジムには金も食べ物もなかったが、「自由」と「時間」はありあまるほどあった。

◇ 『The Magic Barrel & Other Stories』 (魔法のたる他)

B. Malamud 英米文学叢書 H2～

貧乏だが誠実な人間が、その苦しい生活の中で夢を見て、その夢が少しだけかなえられる、というような、暗いが明るい話を読みたい人はどうぞ。何しろ作者のモットーは、「生きることは苦しむことなのだ」なのだから。

◇ 『Psycho』 (サイコ) Robert Bloch 南雲堂フェニックス H2～

かの有名な監督、A. Hitchcock により映画化されたホラー。出来心で職場から大金を盗んだマリオンは逃亡中、ある場末の宿に寄る。宿の経営者の若者は彼女に対して親切だった。恐怖はここから始まる。決して夜、1人では読まないで下さい。

◇ 『The Fugitive』 (逃亡者) J.M. Dillard 南雲堂フェニックス H2～

Harrison Ford 主演の映画を観た人もいるだろう。妻殺しの犯人に仕立てあげられた医者キンブルの大逃亡劇。犯人は義手の男。その男さえ見付ければ無実を証明できる…。しかし事件はそれ程単純ではなかった。

◇ 『Short Stories of O. Henry ‘The Cop and the Anthem’』

O. Henry H2～

公園に暮す男が、冬を快適な刑務所で過すために、警官に捕まえてもらおうとする。しかし彼が捕まったのは、何とも皮肉な瞬間だった…。『警官と聖歌』は、日本では「最後の一葉」「賢者の贈りもの」などの作品で知られる O. Henry の短編の一つ。

◇ 『Harry Potter and the Philosopher's Stone』

J. K. Rowling Bloomsbury H2～

ハリー・ポッターは、どこにでも居るような、さえない少年だった。ところが、そんな彼が、実は魔法使いだった！ 11歳の誕生日に、魔法使いの学校に入学することになった彼は果たして…？ 平易な文章で、比較的読みやすい。

※「英語多読」知っていますか？読んで字のごとく、英語を沢山読むことです。「俺には無理」と思っている英語が苦手なあなた、それは大きな間違いです。英語の単語が沢山書いてある本を見ると腰が引けるのは当然です。英語読書はもっと気楽に始めていただきたいものです。絵が沢山書いてある、読めそうな本からどんどん読んでいく、つまらなかったらすぐ次の本へ移る、それが肝要です。義務から読むのではなく、楽しいから読む、そういう楽しみを是非夏休みに発見してもらいたいと思います。

図書館では入ってすぐの一等地に学習用の素晴らしい英語の本がそろっています。それを利用しない手はありません。その際のヒントとして以下のことに留意してください。

- ①自分には簡単すぎると思える本から始める。変なプライドは捨てましょう。高校生でもまずは最も簡単な本から読み始めることをお勧めします。
- ②分からない単語が5%以下くらいの本を選び、分からない語はなるべく辞書に頼らず文脈や挿絵から類推する。
- ③面白くない本は我慢して最後まで読まず、次の本を手にする。

麻布でも2013年度の高校1年生の授業から「多読」を導入しました。授業見学に行ったある中学では中1でもみな読書を楽しんでいました。読める本から始めれば中1からでも十分「英語読書」が楽しめるのです。

読書が楽しめて、英語力もアップ。そんな英語読書の楽しみを夏休みに発見してください。まずは図書館で英語の本を借りてみましょう。結局読まなかったとしても全然OKです。

なお、図書館では3階に学習用でない普通の英語の本も揃えてあります。背伸びをしてこのような本を手にとってみるのもいいでしょう。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
Well-Loved Tales		Lady Bird Ltd.	M1～
Lady Bird Children's Classics			〃
Oxford English Pictures Readers Color Edition		Oxford U.P.	M2～
(以上は図書館の洋書の棚に シリーズとしてそれぞれ数十冊揃っている。)			
King Midas and Other Stories		令文社	〃
(step by Step Junior Readings)			
Man of Everest		Oxford U.P.	〃
Elementary Stories for Reproduction		〃	〃
Fifty Famous Stories	J. Baldwin	北星社他	〃

書 名	編 著 者	発 行 者	学年
Intermediate Stories for Reproduction 〔M3以上でYohan (洋販) から Ladder Edition として、 500語から3,000語のレベルの種々の分野の読み物が出ている。〕		Oxford U.P.	M2～
Advaced Stories for Reproduction		Oxford U.P.	H1～H2
Come with me around America	R. Goodman	開 拓 社	〃
Little House in Big Woods	L. I. Wilder	研究社英米児童 文 学 選 書	〃
Kontiki	T. Heyerdhal	英 潮 社	H2～
Poetry for You	C. Day Lewis	南 雲 堂	〃
People and Places	M. Mead	北 星 社	〃
Modern American Short Stories (1), (2)		研究社英米児童 文 学 選 書	〃
The World and the West	A. Toynbee	〃	〃
My name is Aram	William Saroyan	Penguin Books	〃

数 学

◇『数の悪魔 算数・数学が楽しくなる12夜』 H.M.エンフェンベルグ - 晶文社 M
パスカルの三角形、フィボナッチ数列、無限など数の不思議について、数の悪魔がやさしく教えてくれる。具体的な内容を扱っているので、副題に「算数・数学が楽しくなる12夜」とある通り、中学1年生にも楽しめる。

◇『正多面体を解く』 一松 信 東海大学出版会 M3～H2
高度な対称性をもつ立体—それが正多面体である。正多面体は5種類しかないことが知られているが、本書はその対称性をいろいろな視点から分析している。また、準正多面体や星形正多面体に関する話題も多く、これらの立体模型作りにも是非トライしてほしい。

◇『数学ガール』 結城 浩 ソフトバンククリエイティブ M3～
高校生の「僕」がミルカさんとテトラちゃんという二人の少女と数学の問題に立ち向かう物語。小説風で読みやすいが、扱う題材はフェルマーの最終定理、ゲーデルの不完全性定理など挑戦しがいのあるものばかり。この夏は数学ガールとめくるめく数学の世界へ。

◇『世界でもっとも奇妙な数学パズル』 ジュリアン・ハヴィル 青土社 H1～

球をいくつかの断片に分け、それらを組み合わせると、もとの球と大きさが全く同じ二つの球を作ることができる—バナッハ・タルスキーの逆説とよばれるこんな話を知っていますか？この本では、このように直感に反する数学の深遠な世界が垣間見れるでしょう。

◇『ブルーボックス』 講談社 M～H

「円周率 π の不思議」、「虚数 i の不思議」、「無限の不思議」など、ブルーボックスのなかには、中学生でも読めるものから高校生でも難しいものまでと、数学関係の本がたくさんある。夏休み中に一冊は読んでみよう。

◇『数学が生まれる物語 1～6』『数学が育っていく 1～6』

志賀浩二 岩波書店 M～H

著者が優しい語り口で語る、本の中を教室に見立てた講義形式の内容になっている。数学の中に出てくる数とは何か？方程式とは何か？といった素朴な疑問に答えてくれる本である。

◇『なっとくする オイラーとフェルマー』 小林昭七 講談社 M～H

フェルマー・オイラーという2人の数学者に焦点をあて、初等整数論の様々な話題を、歴史背景にも触れながら読める。中1から高3まで、学年を問わず楽しめる内容と思う。素数・連分数・黄金比・ゼータ関数など、不思議な整数の世界を覗いて楽しんで欲しい。

◇『オイラー入門』 W. ダンハム シュプリングー・フェアラーク H

レオンハルト・オイラーは18世紀を代表する偉大な数学者の一人である。オイラー線、オイラー定数、オイラー積など彼の名のつく用語も多い。本書では彼の業績のいくつかを歴史的な流れを含めて高校生でも理解できるように解説している。この夏、「オイラーの世界」に浸ってみては？

◇『オイラーの贈物 人類の至宝 $e^{i\pi} = -1$ を学ぶ』

吉田 武 東海大学出版 H1～

一つの数式を目標に、高校数学・大学数学の枠にも、代数・幾何・解析の分野にもとらわれず、様々な数学の世界を覗きながら学べる本である。大学レベルの少し進んだ話題に興味ある高校生に薦めるが、予備知識不要なので、頑張れば中学生でも読むことが出来る。

◇『日本の数学・西洋の数学』 村田 全 中公新書 H1～

日本の数学（和算）は、西洋の微積分と同じ成果を全く別途に獲得したといわれるが、本当に同じものなのか。その背景にある世界観（思想）の違いが何を意味するのか、数学

の発展とは何かを考えさせられる本である。

◇『数論的古典解析』 M. ケッヒャー シュプリンガー H2～

この本は解析の体系的なテキストではなく、無限級数に関係した話題を集めたものである。内容は高度であるが、第4章の代数学的应用と数論的应用における微分積分と整数論の融合からは、数学の奥深い一面がかいまみられることだろう。

◇『思い違いの科学史』 青木国夫他 朝日新聞社 M～H

人類の科学的認識の歴史を振り返ると、単調に認識が広がって来た訳ではなく、エポックメイキングな事件を契機にドラスチックに変化してきている。その意味で、フロジストン説などを簡単に切り捨てる訳にゆかないことを考えさせる。

◇『若き日の思い出 数学者への道』 彌永昌吉 岩波書店 M～H

日本を代表する数学者の一人である彌永昌吉氏による自伝。氏の若い頃の暮らしぶりや、氏を含む世界第一線で活躍していた数学者たちの日常が事細かに描かれており、非常に興味深い。

◇『生きること学ぶこと』 広中平祐 集英社文庫 M

著者の広中氏の自伝。広中氏の幼少時代から研究者時代の間に関わってきたかを紹介している。研究者の横顔をかいまみられる本である。

◇『志学数学』 伊原康隆 シュプリンガー・ジャパン H

将来数学の研究者になりたい人や数学者を取り巻く環境の雰囲気に興味を持っている人に読んでほしい。著者の豊富な経験に基づく実践的な知恵や工夫が書かれている。第Ⅲ章は論文の書き方についての技術的な内容のため読み飛ばしてもよいかもしれない。

◇『神々の愛でし人々』 インフェルト 日本評論社 M～H

ナポレオン・ボナパルトの第2王政に抗してパリ市民が決起した2月革命のバリケードの中に、現代数学の根幹をなす群論の考え方を創設した、エバリスト・ガロアが居た。その数奇な運命を描く、是非推めたい一冊である。

◇『数学（1冊でわかるシリーズ）』 ティモシー・ガウアーズ 岩波書店 M～H

題名からするとお手軽な感じで、硬派な麻布生は逆に敬遠しそうだが、内容はいたってまじめであり、中一から数学教員にまで薦められる。現代的な数学は抽象性によって特徴付けられるのだが、これは高校までの数学では理解し辛い。本書は抽象的であるとはどのようなことなのかを丁寧に説明していて、諸君の知っている数学は、いわば万人向けに希

積されたものであることがわかるだろう。

◇『いかにして問題をとくか』 G. ポリア 丸善 M~H

いわずと知れた有名本であり、あえて推薦するまでもないかもしれない。題名からするとハウツー本のような感じだが、この本を読んだからといって数学の成績が劇的に上がったりはしないので、数学の参考書のような感覚で読むものではない。どちらかというと教員向けかもしれないが、生徒が読んでも十分興味深いと思う。数学に関するところで、よくわからないところは読み飛ばしてよい。拾い読みするのもよいし、第IV部に載っている問題を考えるのもよい。もっと簡単に、表紙裏だけ見てもよい。表紙裏にこれほどためになることが書いてある本を私は知らない。

【その他】 ※印のものは、手に入れにくいものですが、図書館にはあります。

書名	編著者	発行者	学年
関数を考える	遠山 啓	岩波科学の本	M
数は生きている	銀林 浩	〃	〃
はじめて出会うコンピュータ科学(全8巻)	徳田 雄洋	岩波書店	〃
おもちゃの科学1~6	戸田 盛和	日本評論社	H
※微積分読本	田村 二郎	日本評論社	〃
数学をつくった人々	T・ベル	東京図書	M~H
πの歴史	P・ベックマン	蒼樹書房	〃
美しい数学シリーズ 壺の中(絵本)	安野・野崎・森	童話屋	〃
※幾何とその構造	寺阪 英考	筑摩書房	〃
数セミブック	一松 信他	日本評論社	〃
岩波入門シリーズ(1~8)	小平・松阪 他	岩波書店	〃
ガードナー数学ギャラリー	ガードナー	丸善	〃
ベンローズ・タイルと数学パズル			
落とし戸暗号の謎解き			
メイトリックス博士の生還			
フェルマーへの最終定理	サイモン・シン	新潮文庫	〃
※手づくりの数学	R・ケイデッシュ	河出書房新社	〃
幾何への誘い	小平 邦彦	岩波書店	M2~
高校生に贈る数学I, II, III	小平 邦彦 他	〃	H2~

日 本 史

◇『木に学べ』 西岡常一 小学館ライブラリー M1～M3

著者は法隆寺棟梁の家に生まれ、幼い頃から修業を積み重ね、「法隆寺昭和の大修理」に携わった宮大工です。長年の棟梁としての経験を踏まえて、法隆寺とヒノキの関係・木の性格・道具の特徴・宮大工の生活などを現代木造建設への批判を含めて語っています。

◇『遺跡が語る日本人の暮らし』 佐原 真 岩波ジュニア新書 M2～M3

著書は「あとがき」で、少年時代から考古学に進むことを決めており、「おとなになってからこの学問をはじめた人よりも、みなさんにずっと親しく語りかけることができる」と自負しているように、広い学問的視野に立って実証的に、縄文時代から弥生時代の衣食住生活を斬新な切り口で明快に語ってみせる。

◇『武士の家計簿』 磯田道史 新潮新書 M2～

本書は、幕末維新期に金沢藩の「御算用者」を務めた猪山家の古文書を読み解き、近世から近代という激動の時代に生きた一武士の実像に迫った労作である。猪山家の「家計簿」の綿密な分析により当時の武士の暮らしを生き生きと描き出しており、著者の綿密な実証的作業に裏打ちされた鮮やかな歴史叙述は、一研究書としても読み応え十分である。

◇『鎖国＝ゆるやかな情報革命』 市村佑一 講談社現代新書 M2～

江戸時代の鎖国の二百数十年間、幕府は情報の発信を停止し続けたが、海外特にヨーロッパに関する情報は丹念に受信し続けこれを分析した。この海外情報は次第に民間にも広まり学ばれて「ゆるやかな情報革命」となり、日本の近代化を着実に準備することとなる。

◇『黄金太閤』 山室恭子 中公新書 M2～

秀吉が湯水のように金銀を使って、派手なイベントや祭りをいろいろ工夫して催す裏にひそむ思惑は何か。さらに悪名たかい朝鮮戦略実行に至る原因について、平易な文章表現と斬新な構成によって、読む者を引きつける魅力がある一冊である。

◇『武家の棟梁の条件』 野口 実 中公新書 M3～

よく歴史小説やテレビドラマの主人公に武士が扱われている。その作品中に登場する武士達は、高潔で忠義を重んじる人間として叙述され、演じられる。本書はその武士像を徹底的に否定し「暴力集団」・「職業的殺し屋集団」としての武士の本質を暴いてくれる好著である。

◇『鎖国をはみ出した漂流者』 松島駿二郎 筑摩書房 M3～

旅行作家の著者が「正史にあらわれない日本人の足跡にたいする興味」から、万次郎、彦蔵、音吉、大日本平四郎、初太郎、力松などの漂流民の足跡と資料をたどった歴史探訪記。なお「海を渡った幕末の曲芸団」（宮永孝、中公新書）も内容の深い類書である。

◇『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』 吉田守男 朝日文庫 M3～

京都が米軍によって空爆されなかったのは、アメリカが日本の貴重な文化財の価値を認めて、破壊を避け、戦争終了後の占領政策を円滑に行おうとしたためであるとする説が今でも様々な書物に引用されたりしている。しかしこれは全くのデタラメであり、米軍は京都を第三の原爆投下候補地のひとつとしていたのである。この本は、なぜこのような誤った俗説が戦後国民に流布し定着していったのか、またなぜ京都が原爆投下目標地に選ばれ、そして外されていったのか、という問題について丹念に史料を調べて、歴史的事実を明らかにした好著である。是非諸君に読んで欲しい。

◇『客分と国民のあいだ 近代民衆の政治意識』 牧原憲夫 吉川弘文館 H1～

われわれは近代社会における「国民」の一員として生きている。その意識は普段自覚する機会のないほどに空気のようなものであろう。では明治維新以降、「国民」としての意識はいかにしてつくられていったのか。それを単に国家による統合の論理からみるのではなく、民衆の主体性や伝統意識との関係のなかで検討したのが本書である。本書を読むと、近世と近代のあいだでせめぎあう民衆の意識のありようが伝わってくる。そして現在のわれわれの「国民」意識を相対比するきっかけを与えてくれる。

◇『日本の歴史をよみなおす』（正・続） 網野善彦 筑摩書房 H1～

本書は一つのテーマを追求したものではなく文字の問題、貨幣と商業・金融など五章から成っている。その中で第三章畏怖と賤視、第四章女性をめぐるが、日本歴史のなかの差別問題をテーマに記述されており、従来あまり追求されなかった面に光をあてている。

◇『王政復古』 井上 勲 中公新書 H1～

幕末の動乱の総決算というべき王政復古という政変を、慶応三年という一年間だけの政治・社会情勢を追求している。300余ページにわたる本文は実証的なもので、史料を多用しつつ、詳細な記述になっており、概説書というよりも、研究書に近い。

◇『安政江戸地震―災害と政治権力』 野口武彦 ちくま新書 H1～

兵庫県南部地震を神戸で体験した日本思想史学者が、幕末1855年巨大都市江戸を襲った直下型の安政地震に注目し、多くの証言を駆使して、深刻な人災にまで転化した被害の実態・特徴から社会不安の様態、幕府権力の災害への対応、この地震が幕府倒壊にまで及ぼ

した影響等について入念に考証してみせる。

◇『戦争の日本近現代史』 加藤陽子 講談社学術新書 H1～

明治・大正・昭和前期に生きた為政者や国民が、その時々の世界情勢や戦争相手国と日本の関係をどのように捉え、戦争を「してもいい」・「しなければならぬ」と意識するに至る認識の変化を明解に説明してくれているのが本書である。これを読めばアジア・太平洋戦争について、「日本はなぜ無謀な米国との戦争に踏みきったのか？」というよく発せられる陳腐な「問い」が歴史を理解する上で誤った「問い」の設定であることをこの本を読むと理解できる。

◇『書き替えられた国書』 田代和生 中公新書 H2～

朝鮮海峡に浮かぶ対馬は農地が乏しく、古代からとくに朝鮮との交易が島民の生活にとって不可欠であった。対馬の領主宗氏は、豊臣秀吉の朝鮮侵略で杜絶した日朝間の国交再開を図って危険極まりない計略を実行し、朝鮮戦貿易を再開させたが……。対馬藩による徳川将軍と朝鮮国王の「国書」偽造事件の顛末を描く。

◇『日本の誕生』 吉田 孝 岩波新書 H2～

畿内のヤマトを本拠に発展した日本の古代王権が、中国王朝や朝鮮半島の国々と、そのときどきいかなる関係と距離を保ちながら、独自の国制や文化を形成・展開させていったのかを、平安時代までの千年以上の歴史の動向のなかで縦横に論じた刺激的な著作である。

◇『古墳とヤマト政権』 白石太一郎 文春新書 H2～

古墳研究の第一人者である著者は、三世紀中頃からの前方後円墳を中心に、畿内ばかりか全国に分布するこの古墳の緻密な分類・分析を通して、文献資料も充分に活用しつつ、ヤマト国家の頂点に立つ大王権力の成立・発展の過程を実証的に鮮やかに跡づけてみせる。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
海から見た戦国日本 — 列島史から世界史へ	村井章介	ちくま新書	M2～
幕末維新の民衆生活	佐藤誠朗	岩波新書	〃
正倉院	東野浩之	〃	M2～M3
平将門の乱	福田豊彦	〃	〃
日本庶民生活史	宮本常一	中公新書	M3～
東と西の語る日本の歴史	網野善彦	そしえて文庫	〃

書名	編著者	発行者	学年
信長と天皇	今谷 明	講談社現代新書	M3～
秀吉の経済感覚	脇田 修	中公新書	〃
忘れられた日本人	宮本 常一	岩波文庫	〃
日本の宗教	村上 重良	岩波ジュニア新書	〃
歴史を学ぶこと	鹿野 政直	岩波高校生セミナー	〃
雨森芳洲	上垣 外憲一	中公新書	〃
身分差別社会の真実	斎藤 洋一	講談社現代新書	M3～H2
幕末の天皇	藤田 覚	講談社メチエ	H1～
源平合戦の虚像を剥ぐ	川合 康	〃	〃
蘇る中世の英雄たち —「武威の来歴」を問う	関 幸彦	〃	〃
明治維新	色川 大吉	岩波新書	〃
「明治」という国家[上][下]	司馬 遼太郎	日本放送出版協会	〃
琉球王国	高良 倉吉	岩波新書	〃
ある被差別部落の歴史	岡本 良一	〃	〃
韓国併合	海野 福寿	〃	〃
日本軍政下のアジア	小林 英夫	〃	〃
近現代史をどう見るか —司馬史観を問う	中村 政則	岩波ブックレット	〃
日本論の視座	網野 善彦	小学館ライブラリー	〃
朝鮮通信使がみた日本	姜 在彦	明石書店	〃
室町の王権	今谷 明	中公新書	H2～

世界史

◇『人類進化99の謎』 河合信和 文春新書 M1～

残念ながら歴史教科書の古人類に関する記述は時代遅れ。猿人→原人→旧人→新人などという区分と直線的な進化過程は、誤解を生むだけ。実際は多種の人類が同時に存在しており、我々ホモ・サピエンスとネアンデルターレンシスが同時に存在していたばかりか、最近では東南アジアにホモ・フロレシエンシスが約1万年前まで存在していたことが解明された。人類の多様な進化の足跡をきちんとたどってみよう。人間に対する見方も修正を余儀なくされるだろう。「ネアンデルタルと現代人」（文春新書）も併せて読みたい。

◇『科挙』 宮崎市定 中公新書 M1～

現在の日本は厳しい受験地獄といわれるが、それがかつて外国にもあったということを如実に語ってくれる。試験をめぐるかけひきに人間性が垣間見られ、大変興味深い。中国史の知識がなくとも読め、広く諸君にすすめられる。

◇『河童が覗いたインド』 妹尾河童 新潮文庫 M1～

舞台美術家として有名な妹尾河童が、多種多様なインド文化を、自ら歩き、触れた事柄を中心にまとめた旅行記です。筆者直筆の挿し絵のみならず、文章に至るまで、全て手書きで、旅行の臨場感がひしひしと伝わり、飽きさせない1冊です。

◇『中世の星の下で』 阿部謹也 ちくま文庫 M1～

歴史の授業では、そこに生きていた人の生活はなかなか伝えることができない。そのような中でこのような本を読んでもくれば、「あ、ヨーロッパ中世にも普通の人が普通に暮らしていたんだなあ。」と感じてもらえるだろう。

◇『ジャガイモの来た道』 山本紀夫 岩波新書 M1～

イモはあまりイメージがよくない。「お前はイモ」とか「イモ娘」とか言われて、いい感じがしたり、素敵な女性だとイメージする人はまずいないだろう。しかしジャガイモは中南米のアンデスで文明を支え、さらには世界に広がって各地の飢饉を救い、そしていまお多くの人々の食を支えている。ジャガイモを追って世界を旅した植物学・民族学者による「ジャガイモ文明」論。

◇『物語 古代ギリシア人の歴史』 周藤芳幸 光文社新書 M1～

古代ギリシアの歴史は「栄光」につつまれている。しかし「栄光」の陰に生きていた人々の実像はどうだったのだろうか？遺された史料から大胆な類推をしながら、地中海世界各地で生きたギリシアの人々の歴史に迫る野心作です。

◇『オスマン帝国』 鈴木 董 講談社現代新書 M2～H1

オスマン帝国史研究の第一人者である著者が書いたやさしくかつ興味深いオスマン帝国史の概説書。イスラーム教徒が残忍かつ野蛮だという偏見がいかに現実とかけ離れたものであるかを、丁寧に解説してくれる。

◇『ローマ帝国』 青柳正規 岩波ジュニア新書 M2～H2

ローマ帝国史全体をカバーする概説書。人物を中心にローマ史を概観している。この本でローマに関する基礎知識を学び、興味を持ったら、塩野七生『ローマ人の物語』に挑戦してみよう。ローマから現代の私たちが学べることは、実に多いことに気づかされるだろう。

◇『ローマ人への20の質問』 塩野七生 文春文庫 M3～

私たちは「滅亡」という結末を念頭にローマ史を見てしまうことが多い。しかし、当時のローマ人は滅亡を意識して生活していた訳ではなく、そういう意味で歪んだ歴史の見方をしているとも言える。この本は、当時の視点で書かれており、回顧録のような印象を受ける本である。ぜひ未来人としての先入観を除き、ローマ史を見てほしい。

◇『入門 人間の安全保障』 長有紀枝 中公新書 H1～

「人間の安全保障」！？ 聞き慣れない言葉かもしれませんが、紛争・暴力・災害・飢餓・差別のなかで、どのようにして私たちが人間らしく生きていけるのか、を海外での支援事業に携わってきた著者が冷静に、わかりやすく説いてくれます。震災後の日本も他人事ではありませんね！！

◇『聖書の読み方』 大貫隆 岩波新書 H1～

聖書は世界一のベストセラー！と言うけれど、読みにくい本です。「聖書の読みにくさ」を前提に、日本の聖書学研究をリードしてきた著者が、信仰なき人々にも聖書の構造と仕組みを平易に解説してくれます。

◇『論語 真意を読む』 湯浅邦弘 中公新書 H1～

近年論語が流行している。本書では「ああ、老いたるかな、我、夢に周公をみず」という1フレーズを取り上げ、古代中国から現代に至るまでの中国思想を概観しながら論語を見直している。格言として礼賛すべき論語ではなく、多角的な観点から論語を分析しており、興味深い一冊である。

◇『地域からの世界史 全21巻』 板垣雄三他 朝日新聞社 H1～

朝鮮、中国からはじまり世界を15の地域に分けて、その地域の通史が書かれているシリーズ。ラテンアメリカ、アフリカ、オセアニアなど他では通史として手頃なものがない地域もカバーしているし、内容も平易で読みやすい。

◇『イギリス近代史講義』 川北 稔 講談社現代新書 H1～

世界システム論と社会史という歴史の視角は、四半世紀前の学生にとってはとても斬新で、著者による集中講義には感銘を受けた覚えがある。特に年季奉公人の制度は彼の講義で知り、文書でも冒頭に登場する。特にイギリス史に詳しくなくても理解は容易で、昨今政治家が叫ぶ「経済成長」の意味についても歴史からの教訓が語られる。「近代」に関心を持つ人は読むべし。

◇『海を渡ったモンゴロイド』 後藤明 講談社選書メチエ H1～

モンゴロイドは移動する人であった。ある集団は北東アジアから寒冷なベーリンジア地帯を渡って米大陸へ拡散し、別の集団は東南アジアから豪州にかけて存在した陸地へと移っていった。さらに後者は多島海でカヌーによる航海技術を身につけて発展させ、アウトリガー・カヌーやダブル・カヌーと可変式の帆を用いハワイ諸島、イースター島に至るポリネシアへと移住していった。飽くなき探求心と驚くべき航海技術がそこにあった。我々もモンゴロイド、海の民の血を引く者である。海から世界はどう見えるのか、一度考えてみよう。

◇『韓国と日本の歴史地図』 武光 誠 青春出版社 H1～

韓国と日本の歴史認識のズレはしばしば言及されるが、日本の学校では朝鮮半島の歴史をさほど学ばずに過ぎてしまうことが多い。日本史・世界史の選択問わず、本書でじっくり地図を見ながら、日韓の歴史を認識し直してほしい。

◇『日露戦争の世紀』 山室信一 岩波新書 H1～

日露戦争から100年。奇しくもその50年前に日露は国交を結び、50年後にはソ連と開戦した。近代史の分水嶺。そして戦争前後の日本と世界は、黄禍論、ボグロム、第2インター、アジア民族運動のみならず、文学や絵画でも繋がっていた。国内でも戦前の寮歌が後の軍歌や革命歌・労働歌へ連鎖していくという視点は非常に新鮮だ。少年時代に口ずさんでいた「金色の民いざやいざ 大和民族いざやいざ」というフレーズの意味を、僕は初めて知ることができた。

◇『かくれ仏教』 鶴見俊輔 ダイアモンド社 H1～

鶴見俊輔は、現在の中国大使館のある場所で生まれ育った人である。アメリカに留学し哲学を学んだ彼は、激動の戦中・戦後を生きたが、その彼が米寿を記念して書いたのが本著である。政治思想、宗教など、分野を問わず、様々な人々の理念と著者の考えとが仏教的な感覚を軸にしながら体系的に語られている。また、様々な思想家の概略が注記されており、ありがたい。哲学や政治思想などに抵抗のある人に薦めたい作品である。

◇『変貌する民主主義』 森政稔 ちくま新書 H2～

民主主義が18世紀後半のアメリカ合衆国独立やフランス革命に始まるというのは間違いではないが、以後、約200年あまりの間に、様々な環境変化から民主主義も変化してきた。本書では、1960年代以降を現代民主主義とし、その変化とその変化をもたらした諸要因を思想的に解説した刺激的な本である。

◇『戦争論』 多木浩二 岩波新書 H2～

20世紀は戦争の世紀でもあった。国民国家の枠組みを信じて疑わない島国の我々であるが、国民国家とそれを支えるナショナリズムが、20世紀の戦争を絶え間なく作り出してきたのだ。戦争の原理を歴史哲学の切り口で解き明かす書物。現代に関心のある者にすすめる。

◇『戦争を記憶する』 藤原帰一 講談社現代新書 H2～

国が違ふと、歴史認識が違ふということがよくある。日本では原爆投下を肯定する人は極めて少数だが、アメリカでは肯定しない人が少数である。このような現象がなぜおこるのかを、記憶のあり方の歴史という視点から解明していく。

◇『中世シチリア王国』 高山 博 講談社現代新書 H2～

シチリア島。地中海に浮かぶこの島は、それゆえに様々な文明の影響をうけてきた。特に中世には、ビザンツ、イスラーム、西欧、ノルマンなどの文化の混合する独特な世界を展開していた。この魅力ある王国を、世界の第一線で活躍する著者が平明に解説する。

◇『漢帝国と辺境社会』 勅山 明 中公新書 H2～

1930年代より現在の中国西北部、居延の地で発掘された約3万点の木簡、竹簡。そこには今から2000年前の漢の政治体制や、そこで暮らす人々の姿がありありと示されています。これらを読みときながら、漢の辺境社会に生きた人々に焦点をあてる面白い本です。

【その他】

書 名	編 著 者	発 行 者	学 年
生きることの意味	高 史 明	ちくま文庫	M1
古代ローマ帝国の謎	阪 本 浩	光文社文庫	〃
ピラミッドの謎	吉 村 作 治	岩波ジュニア新書	M1～M2
古代への情熱	シ ュ リ ー マ ン	岩 波 文 庫	M1～
ハワイ	山 中 速 人	岩 波 新 書	〃
フランス革命	遅 塚 忠 躬	岩波ジュニア新書	〃
酒池肉林	井 波 律 子	講談社学術文庫	〃
ヒンドゥー教	山 下 博 司	講談社選書メチエ	〃
イスラームを知ろう	清 水 芳 見	岩波ジュニア新書	〃
ギリシア人・ローマ人のことば	中務哲郎、大西英文	〃	〃
中国の五大小説 上、下	井 波 律 子	岩 波 新 書	〃
オリガ・モリソヴナの反語法	米 原 万 里	集 英 社	〃

書名	編著者	発行者	学年
日系人の歴史を知ろう	高橋 章	岩波ジュニア新書	M1～
インドカレー紀行	辛島 昇、大村次郷	〃	〃
イスラームの日常生活	片倉 ともこ	集英社	M2～M3
歴史とは何か	E. H. カー	〃	M2～H1
世界をゆるがした十日間	ジョン・リード	岩波文庫	〃
インド大叛乱1857年	長崎 暢子	中公新書	〃
中国の大盗賊・完全版	高橋 俊男	講談社現代新書	M3～
乞食とイスラーム	保坂 修司	ちくまプリマーブックス	H1～H2
アメリカ合衆国史(全3巻)	安武 秀岳 他	講談社現代新書	H1～
フランス革命	立川 孝一	中公新書	〃
メッカ	後藤 明	〃	〃
大地と海と人間 －東南アジアをつくった人々	鶴見 良行	ちくま少年図書館	〃
バスクとバスク人	渡辺 哲郎	平凡社新書	〃
義賊	南塚 信吾	岩波新書	〃
物語ドイツの歴史	阿部 謹也	中公新書	〃
物語カタルーニャの歴史	田沢 耕	〃	〃
トルコ民族主義	坂本 勉	講談社現代新書	〃
現代アフリカ入門	勝俣 誠	岩波新書	〃
世界史リブレット全128巻(未完)		山川出版社	〃
世界の歴史 全30巻		中央公論社	〃
新書ヨーロッパ史中世篇	堀越 孝一 編	講談社現代新書	H2～
現代アラブの社会思想	池内 恵	〃	〃
新書イスラームの世界史(全3巻)	佐藤 他	〃	〃
新書アフリカ史	宮本・松田 編	〃	〃
グレートジンバウエ	吉國 恒雄	〃	〃
モンゴル帝国の興亡(上・下)	杉山 正明	〃	〃
戦争犯罪とは何か	藤田 久一	岩波新書	〃
イスラエル	白杵 陽	〃	〃
中華人民共和国史	天児 慧	〃	〃
アメリカ外交とは何か	西崎 文子	〃	〃
アメリカ 過去と現在の間	古矢 旬	〃	〃
創氏改名	水野 直樹	〃	〃

地 理

◇『新・歩いて見よう東京』 五百沢智也 岩波ジュニア新書 M1～H1

東京の学校に通いながら、東京を見て歩いたことのない人に絶好のガイドブック。著書は山岳界の有名人であり、地形学の知識からのコメントが随所に見られる。歴史的な背景と共に、日頃見落としがちな街の景観の持つ意味を知る上で東京の街を再発見して欲しい。

◇『地震・プレート・陸と海』 深尾良夫 岩波ジュニア新書 M1

世界で大規模な地震や火山活動の起きる所はほぼ決まっている。そこはどんな所で、何故そこで起きるのかを、プレートテクトニクス理論という考え方から追求している地球科学の入門書。

◇『地球の資源ウソ・ホント』 井田徹治 ブルーボックス M1

新聞記者である著者が、様々な資源の現状とその解説を興味深いタッチでまとめ上げた本。石油に始まり食糧・水産資源まで、現代社会の諸問題を考える上で必要な情報が数多い。「風力はとるにたらないエネルギーか？」この答えを著者はどう記述しているだろうか。

◇『世界の地名つれづれ紀行』 辻原康夫 毎日新聞社 M1～

世界の地名を体系的にまとめた本ではないが、地名を軸にしたこぼれ話やエピソード、ユニークな地名などが数多く載せてある。地図帳を開くのが楽しくなる内容ばかりである。地名表記の問題点の指摘など、見落としがちな問題を鋭くえぐっている部分もある。

◇『地球人の地理講座①～⑥』 大月書店 M1～

「たべる」「すむ」など、生活に密着したテーマで、世界の人々の暮らしを解説した六冊からなるシリーズ。とって、表層的な説明におわらず、その社会の文化や政治・経済の仕組みまで踏み込んでの探求は、どのテーマも共通し、とても面白いシリーズである。

◇『誰でも行ける世界の秘境』 藤木高嶺 朝日新聞社 M1～

文化人類学を大学で教える著者だが、新聞記者時代に行ってきた探検取材が研究のベースになっており、本書はそれをまとめたものである。ニューギニア、中国西域、ブータンなど、様々な地域の人々の暮らしが見えてくるはずである。「秘境」とは何か、考えよう。

◇『アフリカで寝る』『アフリカを食べる』 松本仁一 朝日文庫 M1～

アフリカでの出来事・体験が等身大に報告されている。中学生はアフリカの入門書とし

て一話一話に登場する国を地図で確認しながら読むとよい。高校生ならば既習の知識から、それぞれの話題の背景を分析的に考え、地域性や国の特色を理解する一助としてほしい。

◇『**韓国の若者を知りたい**』 水野俊平 岩波ジュニア新書 M1～

韓国の高校生や大学生は、一体どんな教育をうけ、毎日どう過しているのか。また日本について、どう考えているのか。こうしたことに興味のある人は、ぜひ読んでほしい。なお著者は、韓国のテレビで解説者をやったりしている韓国で一番有名な日本人であるという。

◇『**「ことば」の課外授業**』 西江雅之 洋泉社（新書） M1～

著者は多くの言語をあやつることのできる文化人類学者で、世界中を旅し調査した人である。その人が世界の言語についての見方、状況を興味深い例をとりあげながら、わかりやすく書いた本で、とても面白い。

◇『**誰も知らなかった賢い国カナダ**』 櫻田大造 講談社α新書 M1～

カナダ研究者によって書かれた本だが、非常に平易に書かれている。特に、カナダの独特な外交上の位置や、国内問題への対応についてもわかりやすく解説されている。研究者としての生活もかいま見られるので、そうした関心から読んでもおもしろい。

◇『**朝鮮半島をどう見るか**』 木村 幹 集英社新書 M3～

朝鮮半島についての常識には、意外な誤りが多いことを、十分に例証し納得させてくれる本である。図式化されたイメージで、韓国や北朝鮮を語るのではなく、基本から考えていく方法を教えてくれる本であり、朝鮮半島以外にも応用できるものである。

◇『**地図で読む戦争の時代**』『**地図で読む昭和の時代**』 今尾恵介 白泉社 H1

古い地図と現在の地図を比較すると、地域がどのように変化したか見えてくる。こうした定点観測は「この場所が昔は…」と知るだけでも楽しいものだが、本書では豊富な例をもとに時代背景まで考察している。地形図を眺めながら往時に思いを馳せてほしい。

◇『**人間の大地**』 犬飼道子 中公文庫 H1～

先進国と言われる日本に住む我々にとって「途上国」の苦悩の様子を実感的に理解することは難しい。だからといって目を背け、日本の豊かな生活に浸ってはいけぬ事をこの本は教えてくれる。言葉だけの国際化の議論を止め、国際貢献の本質を理解したい。

◇『**民族の世界地図**』 21世紀研究会編 文春新書 H1～

世界の民族の成立や行動様式について、民族の定義から説き始めている。基本的な入門

書といえる本だが、その内容は高度で決して読み易い本ではない。しかし、最終章で生活にもふれるなど、世界の民族問題や文化に興味のある人には、ぜひ読んでもらいたい。

◇『風土発見の旅』 市川健夫 古今書院 H1～

「地理」誌上で人気のある著者が、風土に根ざした生活の営まれる地域を紹介した本。民俗学的な知識がもり込まれ、非常に興味深い。都会暮らしの君たちに地方の多様性を知ってもらうのに良い内容である。与那国島、吉田村、秋山郷、安塚町、飛島、軽米町など。

◇『食の文化地理』 石毛直道 朝日選書 H1～

世界の食文化について、民族学的な見地からの興味深い報告から始まり、日本の食事まで、食の比較文化論が展開されている。個々の食材にまつわる話や、麺類・食事における野菜の位置というまとめ方で、腹を満たすだけの貧困な食事のイメージを転換させる。

◇『700歳のスイス』 宮下啓三 ちくまライブラリー H1～

スイスの入門書として、まず読んでもらいたい本である。永世中立、山岳観光、直接民主主義、高い国民所得など、広く知られている事柄の背景や、実際の姿などを知ることができる。今の特色を明確にしてから、その理由や歴史を振り返る著述が大変読みやすい。

◇『朝鮮民族を読み解く』 古田博司 ちくま新書 H1～

韓国や北朝鮮についての本は多数出版されているが、この本は朝鮮民族の根底にある思考や行動様式を自らの韓国滞在体験に重ね合わせながら、素直に描き出したという点で、まず最初に読んでほしい本というべきものである。

◇『多文化主義社会の到来』 関根政美 朝日選書 H1～

グローバリゼーションの進展にともなう人的な移動の増加。個々のエスニシティに対する関心は高まる一方である。オーストラリアを例にして多文化主義への歩みが記され、国民国家についても考察が及ぶ。日本の外国人労働者問題について考える参考としてほしい。

◇『「社会調査」のウソ』 谷岡一郎 文春新書 H1～

個々人の意見を集約して、世論を形成するのに役立つはずの社会調査（「豊さ指標」や○×党の支持率△%というものである）の大半がゴミ（役に立たない）だという。その理由から、正しい社会調査のやり方までが、興味深く、楽しく説明されている。

◇『トルコのもう一つの顔』 小島剛一 中公新書 H1～

最近日本からの観光客も多く、話題となる国でもあるが、その知られざる一面を描いた本である。文化や民族の複雑さが、著者の好奇心・探求心から、十分に興味をかきたてる

形で説明されている。一つの国を知ることの難しさがわかる本である。

◇『民族から読みとく「アメリカ」』 松尾弑之 講談社選書メチエ H1～

アメリカ人について、サラダボールとして国民性を理解はしていても、ニュースなどで接するアメリカの人々を単に「アメリカ人」というカテゴリーでしかみていないことも多い。この本を読むことで、さらに踏み込んだ民族性に関心が向けられるようになるだろう。

◇『フランス7つの謎』 小田中直樹 文春新書 H1～

現在のフランスの社会について、7つのテーマをあげて、謎を解くという形で接近した本である。興味深いテーマをとりあげ、自らのフランス滞在の経験をもとに解明していく文章は、ユーモアにあふれ、フランス社会に興味をもつことうけあいである。

◇『ヨーロッパとイスラーム』 内藤正典 岩波新書 H1～

今や移民の大地となったヨーロッパ。多くのムスリムが居住するヨーロッパ社会のあり方を、説得力のある分析で解説している。キリスト教とイスラム教の対立という見方が、いかに誤ったものであるかを、そしてEUの今後を理解するのに必読の書である。

◇『民族とネーション』 塩川伸明 岩波新書 H1～

ヨーロッパで生まれた国民国家が、どのような特徴をもち、世界に広がっていったのか。国民国家の問題点や受け入れた地域での差異などについて、民族とネーションの視点から整理しており、国家やナショナリズムを考える上での基本的理解を得ることができる。

◇『シリコン・ヴァレー物語』 枝川公一 中公新書 H1～

アップル、インテル、グーグルなど現代のコンピュータ産業を語る上で欠かせない多くの企業が、シリコンヴァレーというアメリカの一地域から生まれている。なぜこのように活気あふれた地域が生まれたのか、多くの企業を生み出す秘密とは何かを解き明かす。

◇『2100年、人口3分の1の日本』

鬼頭 宏 メディアファクトリー新書 H1～

日本の人口は50年後には9000万人にまで減少すると予測されている。人口の急激な減少は経済の停滞を招き、家族のあり方を変えるなど、日本社会を根本から変えていく。こうした事態にどうすれば対処できるのか、またどう受け入れるべきなのかを展望する。

◇『地図の想像力』 若林幹夫 講談社選書メチエ H2～

地図の歴史を単純にまとめた本ではなく、地図に表現することがどのような意味を持つのかなど、地図を通して社会と人間の構造や、近代の世界観をうまく描き出している。地図

や測量が国家権力と密接な関係にあるという視点を再確認させられる。

◇『国土計画を考える』 本間義人 中公新書 H2～

巨大な工業施設群や掘込式港湾など、政府の投資がどのような計画で実施されてきたか経年的に理解できる構成になっている。本書を参考にして、産業立地の要因として気づきにくい政策との関連性を把握し、五全総や首都機能移転などの議論に注目してゆきたい。

◇『都市の思想 上・下』 西川幸治 NHKブックス H2～

都市の発達を学ぶ上では教科書的な存在。上巻は平城京や平安京にみられる都市の構造、武士や町人による中世の町づくり、近世城下町などが扱われ、下巻は都市の保存修景計画についてふれている。日本史からの関心にも対応できる内容である。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
川は生きているー自然と人間ー	富山和子	講談社	M1
水はめぐるー生命の源を考えるー	大場英樹	教養文庫	〃
風土学ことはじめ	谷川健一	筑摩書房	〃
地図のみかた	中野尊正	保育社	〃
漫画で読む東南アジア	村井吉敬	ちくま文庫	M1～M3
世界の環境都市を行く	井上・須田	岩波ジュニア新書	M1～H1
アフリカ大陸から地球がわかる	諏訪兼位	〃	〃
調べてみよう暮らしの水・社会の水	岡崎・鈴木	〃	〃
世界はどう動いているか	毎日新聞外信	〃	〃
世界の気象総めぐり	土屋愛寿	〃	〃
農業という仕事	大江正章	〃	〃
地図ざんまいしますか	今尾恵介	けやき出版	〃
大地と海と人間	鶴見良行	筑摩書房	〃
イスラムの怒り	内藤正典	集英社新書	M1～
「食糧」「人口」「貧困」	西川潤	岩波ブックレット	H1～
地球レポート	E. P. エックホルム	朝日新聞社	〃
人文地理学原理	ヴァルター・ドゥ・ブラージュ	岩波文庫	〃
女たちのアジア	松井やより	岩波新書	〃
バナナと日本人	鶴見良行	〃	〃
苦悩するアフリカ	篠田豊	〃	〃
オーストラリア	杉本良夫	〃	〃

書名	編著者	発行者	学年
都市計画	五十嵐・小川	岩波新書	H1～
現代たべもの事情	山本博史	〃	〃
東南アジアを知る	鶴見良行	〃	〃
ダムと日本	天野礼子	〃	〃
環境税とは何か	石弘光	〃	〃
山の自然学	小泉武栄	〃	〃
地球環境報告Ⅱ	石弘之	〃	〃
イラクとアメリカ	酒井啓子	〃	〃
ウォーター・ビジネス	中村靖彦	〃	〃
現代中国 グローバル化のなかで	興梠一郎	〃	〃
食の世界にいま何がおきているか	中村靖彦	〃	〃
地球の水が危ない	高橋裕	〃	〃
パレスチナ	広河隆一	〃	〃
エビと日本人	村井吉敬	〃	〃
アマゾン 生態と開発	西沢・小池 共著	〃	〃
日本の農業	原 剛	〃	〃
民族という名の宗教	なだいなだ	〃	〃
中国現代ことば事情	丹藤佳紀	〃	〃
人間の大地	犬養道子	中公文庫	〃
自然景観の読み方 全9冊	守屋以智雄他	岩波書店	〃
ラブリー ニューージーランド	井田仁康	二宮書店	〃
世界のことば	朝日ジャーナル	朝日選書	〃
東と西 海と山	大林太良	小学館ライブラリ	〃
台湾の選択	保 照彦	平凡社新書	〃
地図のファンタジア	尾崎幸男	河出文庫	〃
伊能忠敬の歩いた日本	渡辺一郎	ちくま新書	〃
世界を動かす石油戦略	石井・藤	〃	〃
現代ロシアを読み解く	袴田茂樹	〃	〃
路面電車	今尾恵介	〃	〃
外国人労働者新時代	井口泰	〃	〃
アフリカの底流を読む	福井 聡	〃	〃
「移動文化」考	片倉もとこ	岩波同時代ライヴ刊	〃
香辛料の民族学	吉田よし子	中公新書	〃
ODA (政府開発援助)	渡辺利夫	〃	〃
民族対立の世界地図 2冊組	高崎通浩	〃	〃

書名	編著者	発行者	学年
イスラム過激原理主義	藤原和彦	中公新書	H1～
最新・北朝鮮データブック	重村智計	講談社現代新書	〃
地名で読むヨーロッパ	梅田修	〃	〃
世界の鉄道旅行案内	櫻井寛	〃	〃
最新・世界地図の読み方	高野孟	〃	〃
地名の世界地図	21世紀研究会	文春新書	〃
ウェルカム・人口減少社会	藤正・古川	〃	〃
食の世界地図	21世紀研究会	〃	〃
中国経済 真の実力	森谷正規	〃	〃
ユーロの野望	横山三四郎	〃	〃
私家版・ユダヤ文化論	内田樹	〃	〃
火山はすごい	鎌田浩毅	P H P 新書	〃
人間と気候	佐藤方彦	中公新書	H2～
新しい民族問題	梶田孝道	〃	〃
日本列島の誕生	平朝彦	岩波新書	〃
山が楽しくなる地形と地学	広島三郎	山と溪谷社	H2～
地下水の世界	榎根勇	NHKブックス	〃

公民・政経・倫理

◇『高杉良 経済小説全集』 全15巻 高杉良 角川書店 M1～

『小説日本興業銀行』、『懲戒解雇』、『広報室沈黙す』、『欲望産業』、『大合併』、『炎の経営者』、『金融腐蝕列島』、『小説巨大証券』等の作品が収められている。幅広い取材に基づいて、株式会社と経営者のかかえる病理現象を小説にしている。この小説を通して、「経済」を知ることができる。

◇『浪費なき成長』 内橋克人 光文社 M1～

「経済社会の新しいあり方」を求めて、現在の「剥きだしの資本主義」を分析している。“日本型「リスク社会」の実像”、“消費者の反乱”、“浪費なき経済成長の時代”の各章に、考えさせられる事実と視点がもりこまれている味わい深い本である。

◇『日本人をやめる方法』 杉本良夫 ちくま文庫 M1～

日本の大学を卒業した著者は、現在オーストラリアの大学で比較文化論の先生をしてい

る。彼はオーストラリアを生活の拠点として活動しているが、彼の議論は日本社会のある種の閉鎖性を浮き彫りにしてくれる。

◇『体験的憲法裁判史』 新井 章 岩波書店 M3～

弁護士として現実に裁判に取り組んできた著者が、砂川裁判、朝日訴訟、メーデー事件裁判、教科書検定訴訟を、意欲的に提示している。著者の自分史的側面も見られて、興味深い内容である。同時代ライブラリーの一冊である。

◇『時代を読む』 加藤周一、樋口陽一 小学館 M3～

日本国憲法を時代の変化の中でどの様に読みこんでいくかを、加藤と樋口の対話で明白にしている。民族と人権と国民国家を論じている対話に、深さと鋭さがある。資料（日本国憲法、大日本帝国憲法、国連憲章、フランス人権宣言等）も参考になる。

◇『新版 法とは何か』 渡辺洋三 岩波書店 M3～

20年ぶりに全面改訂された『法とは何か』である。法と民主主義の精神、法の歴史的変動（欧米型と戦前及び戦後の日本型）、現代日本の法システム、国家統治の法と国民の権利、法の解釈と裁判、国際法と国内法のはざままで、と問題提起が整理されている。

◇『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』

ダグラス・ラミス 平凡社 M3～

著者はアメリカ人だが、すでに長く日本にいて、『イデオロギーとして英会話』など、さまざまな興味深い議論を提示している人物。津田塾大学の教員だったが現在は沖縄で活動している。この本のなかではタイトルのような問題提起のほか、日本国憲法などについても論じている。

◇『人種偏見 太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』

ジョン・ダワー TBSブリタニカ M3～

著者は、アメリカの歴史学者。太平洋戦争を戦った日米両国のそれぞれがいかに排外的な人種主義を振りかざし、操作したか、漫画や映画など具体的なデータを駆使して論証している。ナショナリズムのあり方を考えるとき必読書の一つである。ちなみに、ダワーの戦後日本社会を論じた話題作『敗北を抱きしめて』（岩波書店）は、この著書の続編といえる。

◇『レオニーの選択』 ブルックハルト・ヴェーナー 光文社 M3～

政治に関心をもったドイツのティーンエイジの女の子が主人公。哲学をテーマに一時話題をよんだ『ソフィーの選択』の政治版といったところ。人々が政治から遠のき無関心を決め込んでいる現状はドイツにもあるようで、どうそれを打開すべきか、主人公の試行錯

誤をとおして考えさせてくれる。

◇『最高裁物語』上・下 山本祐司 講談社+α文庫 M3～

第2次世界大戦後の混乱期から現在まで、最高裁判所をはじめとして日本の裁判所をめぐる歴史を知ることができる。最高裁判所長官の人事をめぐる確執を扱った箇所は大変興味深い。著者は、長く司法を担当した新聞記者。

◇『ファストフードが世界を食いつくす (Fast Food Nation)』

エリック・シュローサー (楡井浩一訳) 草思社 M3～

マクドナルドやケンタッキーに代表されるようなファストフード産業は、アメリカ人の食生活や働き方を大きく変化させ、世界中に拡大を続けている。ファストフード国家アメリカの諸問題—農業・労働・食品の安全などは、グローバル化した世界中で問題になっていくであろう。新進気鋭の作家による、秀逸なルポルタージュ。

◇『憲法で読むアメリカ史』上・下 阿川尚之 PHP新書 M3～

アメリカ史と読んでも興味深いし、憲法の歴史と読んでも刺激的である。連邦国家における最高裁判所が、いかに政治的な対立に左右されて生き残ってきたかが展開されている。アメリカの司法制度が日本の司法制度と異なった歴史背景から生まれていることを、知ることができる。南北戦争と黒人問題が、アメリカの最高裁判所に強い影響を与えてきたことを、知ることができる。憲法が社会の中で生きていることを、この新書から理解しよう。

◇『希望のつくり方』 玄田有史 岩波新書 M3～

みなさんは希望を持っていますか？ 希望を持っていない人は、この本を読むことをお勧めします。もしあなたが希望を持っていないとしたら、それは、決して、あなたの個人的な能力や態度の問題ゆえではありません。この本は、希望というきわめて個人的でありそうな問題から出発して、それが実は時代や環境など様々な社会問題のあらわれであることを示したとてもすぐれた本です。希望を持っている人も、ぜひ読んでみてください！ ワンランク上の希望を持てるようになるかもしれません！

◇『超入門・グローバル経済～「地球経済」解体新書』

浜矩子 NHK出版新書 H1～

著者は20世紀までの国際経済ならぬ、21世紀のグローバル経済を総合的に語ることのできる、唯一のエコノミストといえるだろう。市場、通貨、金融、通商、経済といったキーワードの「いま」を、歴史的な視座とともにわかりやすく解き明かしている。そして混迷を極めるグローバル経済への処方はいかに？

◇『<私>時代のデモクラシー』 宇野重規 岩波新書 H1～

現代ではとても「私」が大事であり、その「私」には唯一無二の「私らしさ」がなくてはなりません。そのような個人主義的な時代に、はたしてどのようなデモクラシーが成立するのでしょうか。この本では、筆者の専門であるトクヴィルの思想に導かれつつ、近年のさまざまな政治思想家などを参照しながら、現代デモクラシーの成立の可能性を論じた本です。最近の政治思想を概観する本としても優れていますから、お勧めできます。

◇『戦後の日本経済』 橋本寿朗 岩波新書 H1～

第二次世界大戦後の日本経済を深く分析してあり、戦後日本論とも言える。<日本経済はいま>・<敗戦からの復興>・<飛躍的な経済成長>・<経済大国と経済成長のコスト>の四構成になっている。シャープな主張だけではなく、学問的な誠実さを感じさせる。

◇『日本をどう変えていくのか』 渡辺洋三 岩波新書 H1～

96年3月に出版された、岩波新書の一冊であり、副題として、“「改革」の時代を考える”としてある。家族と法、消費生活と安全、災害と国の責任、国民と司法改革、自衛隊と核安保、行政改革と政治改革の視点から、今の現状を的確に分析している。

◇『経済発展と民主主義』 中村政則 岩波書店 H1～

「人間の歴史を考える」シリーズの第11巻である。政治と経済の相互関係を考える視点を、考えさせてくれる本である。日本の明治維新からバブル経済の崩壊までを、「経済成長とデモクラシー」の関連に重点をすえて分析している刺激的な入門書である。

◇『上海にて』 堀田善衛 ちくま学芸文庫 H1～

第二次世界大戦の敗戦時の中国・上海での体験をふまえた堀田善衛の考察。現在中国をめぐる議論は掃いて捨てるほど多数あるが、日中関係を考えるとき、日本人として忘れてはならない視点を学ぶことができる。著者はすでに亡くなっているが、ヨーロッパから日本古典まで幅広いジャンルで活躍した文学者である。

◇『リー・クアンユー回顧録』上・下 リー・クアンユー 日本経済新聞社 H1～

副題に、ザ・シンガポール・ストーリーとつけられている。35才で首相に就任し、都市国家シンガポールを築き上げた政治家の半生が、語られている。東南アジアと中国を理解するにも、興味深いものである。日本に対する見解にも、考えさせられる。

◇『自由主義の再検討』 藤原保信 岩波新書 H1～

本書は、自由主義が社会主義の崩壊により対抗イデオロギーを失い、その最終的な勝利が言われたりした時代に著された。こうした時代状況にもかかわらず著者は、自由主義の

抱える諸問題を摘出し、それらを批判的に克服しようとする。このさい著者は、1980年代以降欧米の倫理学・政治思想分野の主要な論争点となっていたいわゆる「リベラル・コミュニティアン論争」を概観したうえで、コミュニティアニズム（共同体主義）の立場を鮮明にする。本書は善き生き方、正しき人間社会のあり方を探求しながら、病のために志なかばでこの世を去らざるをえなかった著者の遺作でもある。

◇『不可能性の時代』 大澤真幸 岩波新書 H1～

敗戦後の日本は「理想の時代」「虚構の時代」を経て、「不可能性の時代」にいたったと、著者は言う。「オタク」の登場、「リスク社会」など、現代社会を象徴する事柄に豊富なエピソードを交えつつ、戦後日本社会の来し方に鋭い分析を加えている。「不可能性」に彩られた現代に希望はあるのか。民主主義をめぐる結論部分も圧巻。

◇『シュラクサイの誘惑 現代思想にみる無謀な精神』

マーク・リラ 日本経済評論社 H1～

『無謀な精神——政治のなかの知識人たち』(*The Reckless Mind: Intellectuals in Politics*)という原題が示すように、本書は20世紀を代表する思想家たちによる政治へのコミットメントの失敗の物語をとおして、哲学と政治のあるべき関係を考察している。諸君たちにとっても馴染み深い、サルトルやフーコー、デリダといったスターたちに向けられた辛らつな批判は、現代思想の無批判な受容にたいする強力な解毒剤にもなるだろう。しかしなんととっても読み応えがあるのは、プラトンの『第七書簡』を引きながら、哲学的エロスと政治的野心の関係、知恵と節度の関係が論じられる終章であろう。

◇『経済学は役に立つか』 飯田経夫 ちくま文庫 H2～

以前に「私の経済学批判」として出版された旧著が、増補されてちくま文庫の一冊となった。近代経済学について、南北問題について、保守と革新について、宮崎義一の経済学について、どこから読み始めても、社会科学の在り方を考えさせられる文章に満ちている。

◇『古典的政治的合理主義の再生』

レオ・シュトラウス ナカニシヤ出版 H2～

著者はドイツからアメリカに亡命したユダヤ系政治哲学者であり、北米での影響力はアカデミズムの世界を遙かに越えた広がりをもち、また政治思想の世界で唯一「学派」(the Straussians)を形成した人物である。こうした北米での評価とは対照的に、わが国では専門家以外にはほとんど知られていない。かれの研究スタイルはギリシア古典のテキスト解釈という地味なものであったが、その独創的なテキスト解釈は、一見無味乾燥なプラトンやアリストテレスの哲学を現代に蘇生させ、アメリカの大学生たちのあいだに古典をめぐるの熱狂的な議論を巻き起こした。本書は難解なかれの哲学への最良の入門書である

とともに、その深遠な思想の一端を垣間見させてもくれる。まずは、編者による著者への共感と尊敬の念に満ちた「序論」、および「ソクラテス講義」から読み始めることをおすすめする。

◇『人間の条件』 ハンナ・アレント ちくま学芸文庫 H2～

著者の作品を読んだことがない者でも、その類まれな知性と美貌により、ハイデggerとの不倫をはじめ、今世紀の多くの知識人が彼女の虜となったことは知っているだろう。彼女は、古代においては自由を体現し人間の最高の活動とみなされていた政治すなわち公的領域が、人間の必要に奉仕する経済の領域である私的領域に従属し、それに奉仕するものに没落したという点に近代の問題点を見る。最終的に彼女の主張に賛成するかはともかくとして、読者は彼女の強靱な筆致に引き込まれる。重厚な思想書だが、最初の100ページを乗り切りさえすれば、最後まで読み切ることができるだろう。なお、同じちくま学芸文庫に収められている『革命について』も併せて読まれることをおすすめする。

【その他】

書 名	編 著 者	発 行 者	学 年
あのころはフリードリッヒがいた	リヒター・上田真而訳	岩波少年文庫	M3～
近代民主主義とその展望	福 田 敏 一	岩 波 新 書	〃
現代日本の民主主義	宮 田 光 雄	〃	〃
冷戦から内戦へ	エンツェンスベルガー	晶 文 社	H1～
暗い時代の人々	H・アレント	河 出 書 房	〃
日本銀行	古 川 顕	講談社現代新書	H1～
増補 憲法の論理	久 野 収	筑 摩 書 房	〃
現代政治学の名著	佐々木 毅	中 公 新 書	H2～
経済のしくみ 100話	岸 本 重 陳	岩波ジュニア新書	M3～
大恐慌のアメリカ	林 敏 彦	岩 波 新 書	〃
政治家の条件―イギリス・EC・日本―	森 嶋 通 夫	〃	〃
サミット・クラシー	船 橋 洋 一	朝 日 文 庫	〃
政治革命	山 口 二 郎	〃	〃
日本国憲法を読む	C・ダグラス・ラミス・鶴見俊輔	柏 書 房	〃
ビッグ・ビジネス	宮 崎 義 一	講談社学術文庫	H1～
生活のなかの経済学	伊 東 光 晴	〃	〃
世界経済入門	西 川 潤	岩 波 書 店	〃
日本社会はどこへいく	渡 辺 洋 三	岩 波 新 書	〃
ことばと国家	田 中 克 彦	〃	〃

書名	編著者	発行者	学年
ナチ・エリート	山口 定	中公新書	H1～
時代を打つ Part1, Part2, Part3	立花 隆	講談社	M3～
フォトジャーナリストの眼	長倉 洋海	岩波新書	〃
ベルリンの壁 崩れる	笹本 俊二	〃	H1～
ドイツはどこへ行く	エンツェンスベルガー	晶文社	〃
ソ連解体後	小川 和男	岩波新書	M3～
新聞の読み方	岸本 重陳	岩波ジュニア新書	M1～
新しい民族問題	梶田 孝道	中公新書	H1～
西洋哲学史	今道友 信	講談社学術文庫	〃
日本の思想	丸山 真男	岩波新書	〃
自由論	内山 節	岩波書店	〃
貨幣の思想史	〃	新潮選書	〃
世論 上・下	W・リップマン	岩波文庫	〃
自由論	J・S・ミル	〃	〃
人間 一過去・現在・未来	L・マンフォード	岩波新書	〃
マキアヴェッリと「君主論」	佐々木 毅	講談社学術文庫	〃
自由からの逃走	E・フロム	創元社	〃
社会契約論	J・J・ルソー	岩波文庫	〃
靖国問題	高橋 哲哉	ちくま新書	〃

生 物

◇『すごい虫のゆかいな戦略』 安富和男 講談社 M1～M3

昆虫は考えていない。考える程の脳はないからだ。しかし繁殖に対する戦略はすばらしいものがある。長い年月をかけて、すごい戦略をもつ昆虫が選ばれてきたからだ。共食いなども繁殖のために役立つこともあるというのだから、なかなか世の中単純ではないのだ。

◇『図解雑学 からだのしくみ』 高橋長雄 ナツメ社 M1～

からだの基本構造や働きを図解で楽しく説明してあり、気軽に読めるでしょう。雑学も入っているので、興味をひきだすのに良いです。

◇『好きになる免疫学』 萩原清文著 講談社 M1～

一口で「免疫」と言っても、人間のこのシステムはとても複雑でややこしい。この本で

は、著者がたくさんの種類の免疫細胞をキャラクター化し、複雑な免疫システムをおもしろおかしく解説してくれています。

◇『新版 病気の地図帳』 監修／山口和克 講談社 M1～

私達のからだに起こりうる多くの疾病の症状や原因、治療法などについて分かりやすく解説してある。野球肩やテニス肘などについても触れているので、運動部の生徒にも参考となる一冊です。

◇『深海生物学への招待』 長沼 毅 NHKブックス M1～

暗闇の深海。もちろん光合成をする植物はいない。そのような深海では地上とは全く異なるシステムのアナザーワールドが広がっている。チューブワーム、シロウリガイなど驚くほどたくましい深海生物の生活をのぞいてみよう。

◇『新・進化論が変わる』 中原・佐川 講談社 M1～

地球上の様々な生物が現存するにあたっての背景を色々な角度から紹介している。授業で学んだこれら生物達に対する様々な疑問や矛盾を解消してくれるであろう。むしろ、更なる疑念がわいてくるようならば、たいしたものです。

◇『ソロモンの指輪』 コンラート・ローレンツ 早川書房 M1～

アヒルの子がはじめて見た物を親だと思ってついてくる『刷り込み』現象を発見し、1973年にノーベル生理学・医学賞を手にしたローレンツ博士自身によるエッセイ。鳥語の研究のために、一日湖で過ごしているのに隣人からは遊んでいるだけだと思われる、とか、愛情表現の証に飼っている鳥が口移しでえさをくれるようになり困ってしまうなど、笑えるエピソードが一杯。さまざまな動物を愛し、また動物たちから愛された博士の奇想天外の日常生活がつつられています。

◇『科学101の未解決問題』

ジュースト・トレフィル(美宅成樹) 講談社ブルーバックス M1～

科学現象に対する興味はつきないものなので、更にどうなるのかを追求すると、どうしても現実ではまだ分からない事がいっぱいあるものです。そんなどうして坊やにとっては、おすすめの書です。

◇『図解雑学 遺伝子のしくみ』 池北雅彦 小原康治 ナツメ社 M2～

今や一般人の基本的教養となりつつある遺伝子学についてとっかかりをつけるのに良い本です。基本的な事はやさしく解説されているので、ぜひ読んでみて下さい。

◇『新・細胞を読む』 山科正平 講談社ブルーバックス M3～

とにかく「読む」というより「見る」という方があっているかもしれない本である。ふんだんに使われている電子顕微鏡写真だけでも充分見る価値あり。

◇『細胞と組織の地図帳』 和氣健二郎 講談社 M3～

生物Iで扱う細胞学の参考文献として最適。細胞、組織、器官の具体的な例をみることで興味のある生徒にも満足できる一冊です。

◇『二重らせん』 J. D. ワトソン 講談社文庫 M3～

1953年にDNAの二重らせん構造を発見し、1962年ノーベル医学・生理学賞を受賞したワトソン本人が、発見に至るまでの研究生活、ライバルとのバトル、クリックとの友情などを赤裸々につづったエッセイ。ノーベル賞を目指す君にお勧めします。

◇『iPS細胞 世紀の発見が医療を変える』

八代 嘉美 平凡社新書 M3～

iPS細胞はニュースなどで随分話題になり言葉だけは覚えているが、そもそも一体何なんだろう、この研究がどのようなことに応用できるのだろうか、とと思っている人にお勧めの一冊。iPS細胞を扱う研究室にいる著者が、これまでの研究の流れを基礎知識からわかりやすくまとめている。

◇『寄生虫博士のおさらい生物学』 藤田紘一郎 講談社文庫 H1～

「私は理科の教科書を数冊読んでみたが、あまりにもおもしろくなかった。」と言う著者が高校生物を全範囲に渡り解説している。さすがサナダムシを自分のお腹で育てている変わり者の研究者だけあって、その切り口は独得で軽妙な語り口。楽しみながら生物をおさらいすることができる。

◇『ワンダフル・ライフ』 スティーブン・J・ゲールド ハヤカワ文庫 H1～

著者は進化生物学の先駆的な研究者であり、科学エッセイストとしても世界的に有名です。2002年に他界しましたが、その著書はいつまでも輝きを失いません。この本ではカンブリア紀の世にも不思議な動物を例に、生物進化の偶発性や現存する生物のすばらしさを軽快に語っています。これの後に同著者による『フルハウス—生命の全容』もお奨めします。

◇『生物と無生物のあいだ』 福岡伸一 講談社現代新書 H1～

著者は京大卒業→ハーバード大へ留学→大学教授というバリバリの研究者。ウイルスやDNAらせん構造の発見、PCR（狙ったDNAだけを爆発的に増やす技術）、ノックア

ウトマウス、ES細胞などの歴史的研究を紹介しながら、生物とはいったい何なのかという根本的な問いの答えに迫っていく。テストの時に名前を覚えた有名研究者が、人間臭い、生き生きとした身近な人物として感じられる。ところどころに挿入される研究者の生活、喜び、挫折など著者の実験も研究者を目指す人には興味深いだろう。

◇『大学生物学の教科書 第1巻～第3巻』

D・サダヴァ他著 石崎泰樹／丸山敬監訳 講談社ブルーバックス H1～

アメリカの有名なマサチューセッツ工科大学などで採用されている生物学の教科書。普通これだけの内容の教科書なら、値段も高く、重くて大きく、気軽に読めないと思うが、ブルーバックスという新書サイズで読めるのが画期的である。各章の導入部にあるエピソードが興味深く、つい引き込まれる。専門的な内容であるが、とても分かりやすく解説されているのでとっつきやすい。1巻は細胞生物学、2巻は分子遺伝学、3巻は分子生物学となっているので、興味のある部分だけ読むのもよい。

◇『細胞の分子生物学(Molecular Biology of The Cell)』 教育社 H2～

本当に生物の体の成り立ち、生命について知りたい時は、これを読むと良いでしょう。理解するには、高校生物が理解できていることが条件です。そうでない人は、まずちゃんと授業をきいて勉強しよう。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
免疫と健康	野本亀久雄	講談社ブルーバックス	H
老化はなぜおこるか	藤本大三郎	〃	〃
年骨の動物誌	神谷敏郎	東京大学出版会	〃
好きになる生物学	吉田邦久	講談社	〃
オスメス＝性の不思議	長谷川真理子	〃	〃

物 理

以下の2冊について

20世紀初頭は物理学が革命的な発展を遂げた時代であるが、それと同時に第1次、第2次世界大戦という人類にとって未曾有の悲惨な経験をした時代でもある。物理学や物理学者もこの戦争に翻弄され、あるいは積極的な役割を果たした。

物理学者あるいは科学者といえばまだ男性だけの領域と思われていた時代に、誰もが否

定することが出来ない大きな足跡を残した二人の女性物理学者がいる。

一人は言わずとも知れるキュリー夫人（ポーランド・仏）であり、もう一人は生徒諸君はほとんど知らないと思うがリーゼ・マイトナー（オーストリア・独）である。

◇『マリー・キュリーⅠ、Ⅱ』 スーザン・クイン みすず書房 M1～

ラジウムの発見者であり、女性で初めてしかも2度ノーベル賞を受賞したマリー・キュリーの名を知らないものはいないであろう。マリー・キュリーの伝記といえばキュリーの次女エーヴ・キュリーが著した「キュリー夫人伝」を読んだ諸君は多いと思う。これはこれですばらしい名作であるが、スーザン・クインによるこの書は近年初公開の資料、マリーの日記、友人たちの証言を駆使し、時代背景と科学界の細やかな描写と共に知られざるマリー・キュリーの人間像を明らかにした名著といえる。

◇『リーゼ・マイトナー』 R. L. サイム シュプリガー・フェアーク東京 M1～

「ドイツのキュリー夫人」とアインシュタインが呼んだリーゼ・マイトナーは専門家によるとマリー・キュリー以上に物理学の発展に寄与したといわれる実験物理学者である。それ以上にユダヤ人であるが故にヒットラーの政権獲得によりもっとも大切な実験の途中でドイツから逃れざるを得なくなり、ウラニウムの核分裂を発見をしながら、共同研究者のドイツ人科学者オットー・ハーンと共に受賞されるはずのノーベル賞受賞の榮譽を奪われた「悲劇の女性」として有名である。

この書はマイトナーの生い立ちから死まで詳細な資料を基にして跡づけている。特にナチス支配下のドイツの科学界の状況を詳細に描いておりなかなか興味深い。また、ヨーロッパ中の物理学者、科学者が熾烈な競争を展開し、ついにドイツのオットー・ハーンとリーゼ・マイトナーによって明らかにされたウラニウムの核分裂発見物語は、きわめてドラマチックである。この伝記はかなり大部な本であり読むのに骨が折れるかもしれないが、夏休みをかけて読むに値する本である。

◇『物理なぜなぜ事典1、2』 江沢 洋・東京物理学校 日本評論社 M1～

- 1 力学から相対論まで
- 2 場の理論から宇宙論まで

「力とは何だろうか」にはじまり物理学に関わる日常的な疑問、あるいはかなり専門的な疑問、そして物理学と社会に関わる疑問などありとあらゆる疑問に東京近辺の高校の物理の先生方が答える。中にはこれまでの説明の誤りなども指摘されておもしろい。江沢洋氏は学習院大学教授で、中学生、高校生にわかりやすく物理学の本質を理解してもらうためにこれまで、ユニークな教科書や本を書いている人である。

生徒諸君は、この中から毎日1つずつでも拾い読みすれば物理に関する物知り博士になるであろう。

◇『古典物理学を創った人々 ガリレオからマクスウェルまで』

エミリオ・セグレ みすず書房 M1～

『X線からクォークまで』を著したエミリオ・セグレが20世紀の現代物理学の発展を生み出した土台である古典物理学を確立した人々の人物とその業績をその人たちの論文や詳細な資料をもとに著し、古典物理学形成の歩みをたどった年代記ともいえるものである。ガリレオからケプラー、ニュートンに至る古典力学の確立過程、ファラデー、マクスウェル、ヘルツに至る電磁気学の確立、カルノー、トムソンからクラウジウスに至る熱力学の確立からマクスウェル、ボルツマンによる分子運動論による統計力学の発展過程を詳細に描きだしている。

物理学者たちが作り実験した見事な実験装置の詳細な図もなかなか興味深い。

◇『だれが原子を見たか』 江沢 洋 岩波科学の本 M1～

原子の存在が認められるようになったのは、20世紀になってからである。それまで20数世紀の間、原子のアイデアが出されてから、議論、実験が繰り返されてきた。本書はその歴史的経緯に即して、物理の考え方が学べるように配慮されている。またすぐれた実験指導書でもある。ゆっくり味わってもらいたい。

◇『すごい空の見つけ方』 武田康夫 草思社 M1～

気象写真の第一人者による空の写真集である。太陽という巨大な光源からの光で我々は生活している。人類は眼という光の検出器を発達させ、その色を楽しむという至福の余禄まで享受している。大空に浮かぶ雲によって、それを映し出す太陽の光も様々に変幻していく様を、存分に楽しんで欲しい。

◇『図解入門よくわかる最新レンズの基本と仕組み』(第2版)

桑島 幹 秀和システム M1～

私たちの身の回りに数多く存在している、レンズを中心とした光学機器の原理を分かりやすく説明した本である。光の性質から一通りの解説がしてあるので、単に機械の仕組みが分かるだけでなく、中学・高校で習う光の分野の学習も併せてできる。光についてもっと深く学習したいという中学生、何となく工学系を目指しているが、物理が将来どのような役に立つのか具体的にイメージできないという高校生は、是非読んでみて欲しい。

◇『物理のコンセプト 1巻～9巻』 Paul G.Hewitt 他 共立出版 M2～

このシリーズは全9冊に分かれていて、物理学だけでなく、化学、地質学、天文学の各分野にわたった内容になっている。それぞれ表題にあるように、著者の大学での授業ノートをもとに概念的理解が容易に得られるように組み立てられている。各章末にある問題が特徴的である。本文に関連させながら楽しんでチャレンジして欲しい。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 力と運動 | 6. 物質の変化 |
| 2. エネルギー | 7. 地球の構成と活動 |
| 3. 流体と音波 | 8. 地球の歴史と環境 |
| 4. 電気・磁気と光 | 9. 星と宇宙 |
| 5. 物質の構造と性質 | |

◇『X線からクォークまで 20世紀の物理学者たち』

エミリオ・セグレ　みすず書房　H1～

本書は、未知の放射線（X線）の発見によって第1回のノーベル物理学賞に輝いたレントゲンから、ゲルマンらによる「クォーク」説の導入に至る20世紀の物理学の発展を、湯川・朝永両博士をも含む主だった物理学者たちの人物伝でつづった異色の現代物理学入門書である。

著者はエンリコ・フェルミと共に1934年頃イタリアで中性子反応の先駆的な実験を行い、ファシズムに追われて、フェルミとともに渡米し研究を続け超ウラン元素の発見、反陽子の発見などで1959年にノーベル賞を受賞した物理学者である。すなわち、この物語のかなりの部分はセグレ自身が当事者であると言っても良いであろう。

生徒諸君はこの書によって現代物理学がどのような人たちによって、どのような論争と相互の交流によって発展してきたかその内容を理解できるであろう。それは物理学だけでなく他の科学を学んでゆこうとする生徒諸君に、大きな刺激と示唆を与えるのではないかと思う。

◇『戸塚教授の「科学入門」』　戸塚洋二　講談社　H1～

作者は、ついこの前まで最もノーベル賞に近かった日本人の一人であった。長い間スーパーカミオカンデを拠点に、ニュートリノの研究に没頭し、残念ながら2008年7月に他界された。本書は著者が一般向けに書きためた文章を未公開のものも含めてまとめたものである。第一線の科学者からのメッセージに耳を傾けてみてはどうだろうか。

◇『初歩の物理』　尾花　寛他　東洋書店　H2～

高校の物理を簡単な微分・積分を使ってわかりやすく説明してある。夏休みに高2高3生が今までの分野をまとめて復習するのに役立つと思われる。

◇『見えないものを見るーナノワールドと量子力学』

長谷川修司　東京大学出版会　H2～

著者は、電子回折を専門分野とする実験物理学者である。「見えないものを見る」とは、量子力学に支配されている世界を直接眼で見ることはできないので、そこで起きる現象によってもう少し大きな世界が受ける物理的变化を見つけ出して、元の現象を検証しようと

いうわけである。原子の世界が生き活きと描かれていて、実験物理屋の真骨頂が随所に見られる。内容は少々高度であるが、難しい数式は読み飛ばしても、物質を対象とした物理実験を知る機会になるだろう。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
考える理科10話	小野 周	岩波ジュニア新書	M
摩擦の科学	河野 彰夫	講談社ブルーサイエンス	M~H
放射能を考える	森永 晴彦	講談社ブルーバックス	〃
物理のABC	福島 肇	〃	〃
電子と原子核の発見	スティーヴン・ワインバーグ	日本経済新聞社	〃
重力と原子核の発見	山本 義隆	日経サイエンス	〃
物理学読本	朝永 振一郎	現代数学社	〃
物理学講座	湯川 秀樹	みすず書房	〃
物理学とは何だろうか 上・下	朝永 振一郎	岩波新書	〃
電気のなぞをさぐる	本間三郎・山田作衛	〃	〃
物理のはなし	小出 昭一郎	東京図書	〃
レンズ (マイクロ・マクロ)	INAX キャラリー名古屋	〃	〃
素顔のインシュタイン	マイケル・ホワイト、ジョン・グリビン	新潮社	〃
インシュタインの恋 上・下	デニス・オーヴァーハーバイ	青土社	〃
インシュタイン伝	矢野 健太郎	新潮選書	〃
インシュタイン日本で相対論を語る	アルバート・インシュタイン	講談社	〃
日常の物理学	近角 聡信	東書選書	〃
物理の教室	ベレリマン	東京図書	〃
G・ガモフコレクション	G・ガモフ	白揚社	〃
物理学はいかに創られたか 上・下	アルバート・インシュタイン レオポルト・インフェルト	岩波新書	〃
物理学の世紀	佐藤 文隆	集英社新書	〃
「湯川秀樹物理講義」を読む	湯川 秀樹	講談社	〃
物理学の歴史	竹内 均	〃	〃
物理学の挑戦	日本物理学会	日本評論社	〃
岩波講座物理の世界 地球と宇宙の物理	佐藤 文隆	岩波書店	〃
物理法則はいかにして発見されたか	R・P・ファインマン	〃	〃
宇宙という名の玉ねぎ	F・クローズ	吉岡書店	〃
車で学ぶ物理の世界	佐藤 敏一	学術図書出版社	H
身のまわりの物理	兵藤 申一	裳華房ブルーサイエンス	〃

書名	編著者	発行者	学年
複雑さを科学する 神は老獺にして…… アインシュタインの人と学問	米沢富美子 アブラハム・パイス	岩波科学ライブラリー 産業図書	H 〃
アインシュタイン相対性理論	アルバート・アインシュタイン	岩波文庫	〃
特殊および一般相対性理論について	〃	白揚社	〃
X線からクォークまで	セグレ	みすず書房	〃
磁力と重力の発見1～3	山本義隆	〃	〃
光る原子波うつ電子	伏見康治	丸善	〃

化学

◇『面白くて眠れなくなる化学』 左巻健男 PHP研究所 M

炭素から出来たダイヤモンドでも炭火焼ならぬ「ダイヤモンド焼き」はできるのか？水を飲み過ぎるとどうなるのか？ケーキの銀色の粒の正体は？思わず知りたくなる、試したくなる化学の話題を分かりやすく紹介している一冊。

◇『家庭で楽しむ理科遊び』 宮田光男 裳華房 M1～M3

他教科と違って、理科では実験が不可欠である。特に化学では薬品類が必要になるが、一般家庭には薬品など無いのが普通であろう。本書は、身近にあるものを使って化学の実験を行う手引きである。夏休みに家庭で実験をすれば、化学への興味も倍増するに違いない。

◇『栄光なき天才たち』 作：伊藤智義 画：森田伸吾 集英社文庫(コミック版) M1～

科学、芸術、スポーツなど各方面で輝かしい業績と名声を得た偉人たちがいる。一方で、自身の功績が正当な評価を受けず、栄光から見放された天才たちも数多い。言わば光と影の存在のうち、世間的にもはやされるのは偉人たちの光の部分のみであるが、本書では天才たちの影の部分である素顔と人間性にスポットを当てているところが興味深い。また、漫画というスタイルと森田氏の画力が生み出す栄光なき天才たちの苦渋に満ちた表情が、本書の大きな魅力となっていることは言うまでもない。

◇『ロウソクの科学』 ファラデー 岩波書店 M3～H2

身近なろうそく一本の話をどんどん広げて1冊の本にする、というちょっとおどろく話です。実際にはファラデーの講義録です。面白い話です。安い本ですので、是非読んで下

さい。

◇『化学の歴史』 アイザック・アシモフ 玉虫文一／竹内敬人 訳
ちくま学芸文庫 M3～H3

人類の発展は、化学の発展に支えられてきたと言っても過言ではない。古来から人間が利用してきた様々な物質、中世における錬金術という壮大な無駄、近代における数々の仮説の対立、これらの上に、現在の化学の発展がある。この本では、化学の歴史をたどるとともに、教科書では語られない、諸法則の発見者たちと、その繋がりについて学ぶことができる。

◇『水とはなにか』 上平 恒 講談社ブルーバックス M3～

身の回りで最も一般的な液体である水は、凍るとかえって体積が増加する、気化させるのに大量の熱を必要とするなど、独特の性質を持っている。本書では、水の持つさまざまな性質を詳しく解説し、また生命の維持にとって水が重要な役割を果たしていることをいろいろな角度から考察している。

◇『有機化学美術館へようこそ～分子の世界の造形とドラマ』
佐藤 健太郎 技術評論社 H

炭素原子が結合して無数の物質が生まれている有機化学の世界。授業だけでは収まりきらない有機化学の広がりをおこの本を通じて実感してみるとよいでしょう。

◇『読み物 物理化学』 小出 力 裳華房 H1～H2

化学の分野の中で、理論的な内容を物理化学といいます。本書は、受験参考書とは異なった視点から物理化学について解説したものです。いろいろなたとえを用いて、難しい理論でも理解しやすくなるよう工夫されています。目からウロコが落ちるような本です。

◇『化学結合と反応のしくみ』 長谷川正 裳華房 H3

化学は暗記科目だと勘違いしている人がいる。それは、おそらく「化学反応は、なぜ起こるのか」が理解できていないからだろう。本書では有機化学を中心に、化学反応のしくみが明快に述べられている。この夏に1冊読破すれば、化学の面白さがきつと実感できる。

*図書館3階の奥の本棚には、講談社ブルーバックスや裳華房のポピュラーサイエンスなどの自然科学のシリーズものがずらっと(2500冊以上)並んでいます。その中には、上にあげた本以外に、化学関係のものも多く含まれていますので、各自興味ある本を読んでみてください！

地 学

【気象・海洋】

- ◇『謎解き・海洋と大気の物理』 保坂直紀 講談社ブルーバックス M2～
海洋と大気の大規模な流れ、さらにはエルニーニョなどの地球全体の気候を「数式抜き」で解説する。
- ◇『「雲」の楽しみ方』 ギャヴィン・プレイター・ピニー 河出書房新社 M2～
表題のように、雲を楽しむためのマニュアル本。ユーモアに満ちた記述、最後のモーニング・グローリーなどは一度見に行きたいような気にさせられる。筆者は「雲を愛でる会」の創設者。Web サイトもある。<http://www.cloudappreciationsociety.org/>
※2009年11月28日、NHK ワンダー×ワンダーで放映された。
- ◇『気象学入門』 古川武彦・大木勇人 講談社ブルーバックス M2～
気象全般における手頃な入門書。中高生ばかりではなく、社会人にもいいと思う。
- ◇『大気の進化46億年』 田近英一 技術評論社 M2～
大気の歴史をコンパクトに整理した本。第2の地球はどこを探せばよいのかの展望もある。
- ◇『海のなんでも小事典』 道田豊他 講談社ブルーバックス H1～
なんでも小事典とはいえ、執筆者たちが旧海上保安庁水路部（現海上保安庁海洋情報部）の関係者なので、海の化学・生物の話はあまり出てこないが、海流や潮汐、海底地形などに詳しい。
- ◇『チェンジング・ブルー』 大河内直彦 岩波書店 H1～
海洋研究者による気候変動の解説本。欧米の科学解説本の雰囲気がある。筆者が何回もいつているように、暖かい地球と寒い地球は二つとも安定平衡解で、ほんのちょっとしたきっかけで双方を行き来するのだろう。また、その移行は（地球史的には）極めて短い時間で起こることもわかってきた。
- ◇『流れのふしぎ 遊んでわかる流体力学のABC』
日本機械学会編 石渡良三・根本正光 講談社ブルーバックス H2～
気象と流体力学は密接不可分だが、中学・高校では流体力学はあまり扱われていない。その流体力学をやさしく、でもきちんと説明している。まず「やってみよう」で身の回り

にあるものを材料にして、家庭でもできる簡単な実験を紹介し、「どう役立つ？」で実際の応用例、さらに「タネあかし」で背景の原理を説明している。

【地球】

◇『次に来る自然災害』 蒲田浩樹 PHP新書 M1～

原発の重大事故はそのうち起こるだろう、でもできれば自分が死んでからにして欲しいと思っていた。東北地方太平洋沖地震みたいな M9 クラスの超巨大地震は東海～南海にかけて起こると思っていた。次は関東に何らかの自然災害か。

◇『世界の火山百科図鑑』 マウロ・ロッシ他 日本火山の会訳 柘風舎 M2～

日本と同じ火山国であるイタリアで1999年に出版されたもの。その後の推移については訳者の追補がある。図や写真がきれいなので、見ているだけで楽しい。

前半は火山学、後半は世界の火山の案内である。火山の案内ではその火山へのアクセスも載っているのだから、行きたいなあと思わせる。

キリマンジャロの項では頂上の豹の記述もあり、本当に豹の死骸が横たわっていたと書いてあるが本当だろうか。2006年に私（山賀）が登ったときには見あたりなかった。

◇『大地の躍動を見る』 山下輝夫編 岩波ジュニア新書 M3～

東大地震研究所設立75周年記念事業として編集された本。「式典を開いて、75年という歴史を祝うことより、若い人たちに、私たちが生きている地球についての理解を深めてもらうことのほうが意味があると考えたのです。」とあとがきにあるが、その意図は成功していると思う。

◇『地磁気逆転X年』 網川秀夫 岩波ジュニア新書 M3～

地球ばかりか、月・惑星の新しいデータも紹介しながら、なぜ地球は磁石になっているのか、過去の地球磁場をどのようにして調べるのか、地球磁場はどう変化してきたのか、今後どうなるのかなどが書かれている。地球内部には巨大な電流が流れている、などの事実を知るだけでも驚きかもしれない。

◇『地球が丸ってほんとうですか？ 測地学者に50の質問』

日本測地学会監修 大久保修平編著 朝日新聞社 M3～

地味でありなじみがないし、一般向けの解説書も少ない測地学に、待望の書が出た感じである。測地学が扱う内容、新しい成果などが簡単に説明されている。いまでは当たり前のように使われているGPSも、ほんとはものすごい技術であることもわかる。ただこの本の説明でも、「ジオイド」の概念は難しいかもしれない。

トリビアとしては、山の高さもふつう使われている海拔高度（ジオイド面からの高さ）

の他、地球中心からの距離という考え方もあり、そうするとエベレストは第32位、日本最高峰は沖ノ鳥島になってしまうという。また、検潮所（気象庁が津波・高波を測定する施設）と験潮場（国土地理院がジオイドを決めるための施設）と験潮所（海上保安庁が水路を確保するために潮位を測定する施設）は、管轄官庁が違うということだそうである。

しいて疑問点をあげれば、日本の積雪地方での被害地震が雪が融ける春から夏に多い（冬は雪の重しが効いている）という説の数量的な根拠が示されていないこと、この本の説明では、潮の満ち引きの原因のメインが太陽にあるように思われてしまうこと（ほんとうは月による潮汐力の方が太陽よりも2.4倍大きい）、地球の自転が遠い将来には止まるだろうということ（ほんとうは月につねに同じ面を向けるようになって安定するだろう、そのときの自転周期は60日くらい？）がある。

◇『人類がたどってきた道』 海部陽介 NHKブックス M3～

ホモ・サピエンスの歴史と拡散をたどる。それ以前の人類史は軽く触れられているだけである。すでにホモ・サピエンスのアフリカ単一起源説はほぼ動かしがたいというところに来ている。あとは、そのホモ・サピエンスがなぜ、どのように世界中に拡散していったかであろう。この本はその解説を試みる。

◇『地球の内部で何が起きているのか？』

平朝彦 徐垣 末廣 潔 木下肇 光文社新書 M3～

巨大な地球深部探査船「ちきゅう」はマントルまで掘削できる能力があるという（一部に疑問も出されている）。では、そんな深い穴を掘っていったい何をしようとしているのか。この本は、地球の解説書であるとともに、「ちきゅう」の意義を伝えようとしている本でもある。コラムでは研究者が生の声を伝えている。

◇『万物の尺度を求めて』 ケン・オールダー 吉田三知世訳 早川書房 M3～

地球の形（が赤道方向に張り出した回転楕円体であること）を決めた1730年代の測量に続き、1972年からより精密な1mの長さを決めようとしたフランス。それを担った二人の天文学者（ダンケルクから南下したドゥランブル、バルセロナから北上したメシエン）の動き・考えを軸に話は進む。測量に使った精密な器具とその使用方法や、メートル法のその後にも言及する。

◇『地球史がよくわかる本』 川上紳一・東條文治 秀和システム M3～

最初の2章で現在の地球観を概観し、また地球史編纂の手法を解説する。以後地球史の解説となる。ここではかつての文部科学省特定研究「全地球史解説」で挙げられた7大事件が中心となる。さらに、その時点ではあまり認識されていなかった全球凍結（スノーボールアース）については、独立した章（第6章）が与えられている。

新しい知見、またよくわかっていないこともきちんと述べられている。非常に参考になる。

◇『岩石から読み取る 地球の自叙伝』 マーシャ・ビョーネルド 日経BP社 M3～

環境問題が注目される昨今、世間の目は地球の未来に向けられている。しかし、その未来はこれまで地球が経験してきた46億年という時間の先にあるものであり、その46億年を理解せずしてその先は語れない。では過ぎ去った46億年をどのようにして知るのか、その答えは足元に眠る岩石に秘められている。我々人類や現生生物に至る生命38億年の進化史だって、岩石から読み取られているものなのである。地球は岩石惑星であるということはよく知られているが、その岩石からどのようにして、何が分かるのか。本書は、過去から未来への地球のドラマを岩石から如何に読み取るかを、地質学者の視点から述べた科学エッセイである。著者はアメリカの大学で教鞭を執る女性地質学者であり、地質学者とは地球を構成する岩石等から、地球そのものを読む科学者である。本書がただの地球史物語ではなく、岩石主体の方法論に重点が置かれている点は著者ならではであり、大変興味深い。巻末には用語集や地質時代区分表などもあり、地質学というものを理解しやすい。

◇『超巨大地震に迫る』 大木聖子・額縁一起 NHK出版新書 M3～

2012.3.11の東北地方太平洋沖地震のような超巨大地震を「想定」できなかった地震学者の痛恨の書。「地震予知の科学」（日本地震学会地震予知検討委員会編 東京大学出版会）で、「われわれは意外とすごいことを知っているんだ」といつてしまったことに対する反省の書でもある。

◇『地球全史』 写真：白尾元理 解説：瀬川昌一 岩波書店 M3～

地球史上のさまざまな出来事、事件を記録した場所の写真集。一度は訪れてみたい場所が多い。最期の地球史の解説も簡潔でいいと思う。豪華本だが図書館にある。

◇『日本列島の巨大地震』 尾池和夫 岩波科学ライブラリー M3～

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震を受けて書かれた本。巨大地震を概観する。著者は地震予知には楽観的な見通しを持っているようだが（3.11も「前兆現象」がたくさんあったと書いているし）、だがそれは筆者も書いているように「後出し」が多く、「実用化」はほど遠いように思える。

◇『地球外生命9の論点』 立花隆／佐藤勝彦ほか
講談社ブルーバックス H1～

2013年8月、アメリカの無人火星探査機「キュリオシティ」が無事に着陸し、火星上で調査活動を続けている。自然界では億年単位の時間をかけることができるから、生命の

発生・進化は必然？ でも、ドレークの式（宇宙人方程式）が示すように、宇宙人に出会えるか否かの最大のファクターは、人類（その文明生活）がいつまで続くのかということにある。

◇『生命と地球の共進化』 川上紳一 NHKブックス H2～

地球で発生した生命は、その地球の環境をも変え、さらにその環境に合うように進化し、今日まで連綿と生き続けている。こうした、生命の歴史と地球の歴史の相互関係を軸に話が展開されている。「総合的科学的とは何か」ということが具体的によくわかると思う。さらに「われわれは何者で、どこから来て、どこへ行こうとしているのか。」という根元的な問いに対し、現代科学がどこまで答えられるようになったかもわかる。

◇『進化大全』 カール・ジンマー 渡辺政隆訳 光文社 H2～

進化を総合的に解説する大部の本。注文をつけるとすれば、「共進化」では生命同士の共進化だけではなく、生命－地球の共進化（地球大気の酸素の歴史とか）も取り上げて欲しかったところか。

また、第13章がダーウィンの時代と変わらぬ宗教界（かつての原理主義から現在の創造論まで）との戦いが、アメリカでは今でも大変なんだなあと思わせる。

【地球惑星】

◇『最新・月の科学』 渡部潤一編 NHKブックス M3～

アポロ以後一時途絶えていた月探査が、「かぐや」以降再び活発になってきた。この本はアポロ以後の成果を手際よくまとめ、「かぐや」以降の探査で何を調べようとしているのかを解説する。もちろん「かぐや」の成果がまとめられるのはまだこれからだろうが。

なぜ、月は表・裏非対称なのか、形状中心と重心が2kmもずれているのはなぜか、月の内部構造はどうなっているのか（核はあるのか、マントルが2層に分離しているのは本当か）、ジャイアントインパクト説の確証は得られるのかなど、まだまだ課題は多い。

第7章では有人探査の意義が語られている。有人探査は確かにメリットが大きい、コストがべらぼうになると思う。これはまさに、一般人がそれだけの支出を認めるか（支持するか）にかかっている、そうしたいならこの本の出版など地道な広報が必要だろう。いづれにしてももう私（山賀）は考えても仕方ない年齢なので、若い人の判断にゆだねたい。

いづれにしても、ライト兄弟の初飛行（1903年）からわずか66年で月に到達したが、1969年から40年間の進歩は遅い？ こういうものは段階的に発達するのかな。いまは地道な蓄積の時期？

◇『Google Earthで行く火星旅行』

後藤和久・小松五郎 岩波科学ライブラリー M3～

Google Earth の火星版の紹介。火星の表面を立体画像で見える。もうこんな時代になっているという実感。

◇『星のかけらを採りにいく』 矢野創 岩波ジュニア新書 M3～

筆者は惑星探査機はやぶさ計画に携わった人。章末のコラム「私の旅路」（これまでの人生）が面白い。

◇『宇宙137億年のなかの地球史』

川上紳一 PHPサイエンス・ワールド新書 H

宇宙の歴史を背景に、コンパクトに地球の歴史をかたる。そして、その地球史のなかの重大出来事を残している世界各地の痕跡を紹介する。新書版には珍しく写真がカラーである。

◇『異形の惑星 系外惑星形成理論から』 井田 茂 NHKブックス H1～

1995年以後、太陽系以外の惑星系が続々と見つかった。しかしその姿は、太陽系とはあまりに違うものだった。中心星のごく近くを高速で回る巨大惑星（ホット・ジュピター）、きわめて大きな離心率をもつ（灼熱と極寒の世界を行き来する）惑星（エキセントリック・プラネット）など。

筆者は太陽系形成の「標準モデル」を打ち立てた京大派（林忠四郎）の流れをくんでいる。しかし、その「標準モデル」は、こうした異形の惑星の発見により再検討を迫られている。いま、惑星形成理論は熱気のとつぼの中にあるようだ。そうした興奮が伝わってくる。

【宇宙】

◇『宇宙への秘密の鍵』 ルーシー&スティーヴン・ホーキング 岩崎書店 M1～

世界的に高名な物理学者ホーキング博士とその娘が書いた児童書。全体としては主人公の少年の宇宙冒険の物語だが、宇宙について、科学とは何かということから丁寧に解説されている。子ども向けのストーリーの中に、物質とは何か、太陽系や惑星、星の誕生と死、ブラックホールについて等々、様々な事象に関する最先端の知識が詰まっており、たくさんのコラムや写真もあって大変分かりやすい。物語というスタイルであることによって、単に知識の羅列ではなく、様々な事象のおどろくべき姿が主人公の興奮とともに伝わってくるので、大人でも楽しめる本になっている。

ホーキング博士は『ホーキング、宇宙を語る』などの啓蒙書でも知られるが、本作は“宇宙の成り立ちを子どもたちに解き明かす”ことを主題とする全3部作の物語のうち、2008年に出版された第1巻で、2009年には第2巻『宇宙に秘められた謎』、2011年には第3

巻『宇宙の誕生・ビッグバンへの旅』も出版されている。

◇『宇宙はなぜこんなにうまくできているのか』 村山 齊 集英社 H1～

われわれが存在している（存在できる）ために作られたのかのような宇宙、これを説明する「人間原理」。でも、宇宙はユニバースではなく、マルチバースで、その中の一つがたまたまわれわれに都合がよかったのかもしれない。

◇『すばる望遠鏡』 家 正則 岩波ジュニア新書 H1～

筆者はすばる望遠鏡建設の中心人物の一人。すばる望遠鏡の建設にいたる秘話が多く語られている。すばる望遠鏡の工学的工夫の数々が明らかにされていておもしろい。ガラス（反射鏡）の変形を自動的に補正する能動光学とか、空気の揺らぎを補正する補償光学（筆者のアイデア）など。また、すばる望遠鏡は赤道儀方式ではなく経緯儀方式で動き、駆動は歯車ではなく油を流して望遠鏡を浮かす（摩擦をなくす）静圧軸受になっているそうだ。また独特の円筒状ドームも、風を両側に逃がすためだそうだ。ユニークな赤外線観測装置も紹介されている。

もちろん、すばる望遠鏡で得られる素晴らしい画像や、その解説もバランスよく書かれている。これまで見つけた中でもっとも遠い銀河、重力レンズから見たダークマター、極赤銀河の解釈（レンズ銀河）、銀河中心から円盤の上下に噴き出す超銀河風など。ほかにも、補償光学は医学などにも応用できることも書かれている。

◇『宇宙の素顔』

マーティン・リース 青木薫訳 講談社ブルーバックス H1～

まず第1部で現在知られている恒星・宇宙の歴史を概観する。

第2部では、どうも現在の宇宙の膨張は加速しているらしいこと、そしてそのエネルギーはダークエネルギーとダークマターだろうということを述べる。現在、ダークエネルギーやダークマターの正体は分かっていないわけだが、今後10年以内には明らかになるだろうという展望も述べられている。

第3部は超統一理論への期待、人間原理の評価、マルチバース（多宇宙）理論の可能性を述べる。

訳者は科学書の翻訳では定評のある青木薫氏なので安心して読める。

※P.80のグレートウォールまでの距離は200光年は近すぎる。2億光年の間違いだと思う。

◇『宇宙と生命の起源 ビッグバンから人類誕生まで』

嶺重 慎・小久保英一郎 岩波ジュニア新書 H1～

2004年1月、理論天文学懇談会主催の「起源—ビッグバンから人類へ」というシンポジウムの内容を中学生・高校生向けにまとめ直したものだという。たしかに、目次には興味

深い項目が並んでいる。それらの誰もが持つだろう根元的な問いに、現在科学がどこまで答えることができるようになってきたのかがよくわかる。

◇『太陽は23歳！？』 日栄井榮二郎 岩波科学ライブラリー H1～

2009年7月22日の皆既日食に合わせて出版されたと思われる。皆既日食をネタに恒星の科学を解説する。それにしても1979年のカナダの皆既日食を特集したNHKの番組で、若々しい太陽研究者として登場した日栄井氏がもう第2の職場（明星大学学長）も引退する年齢だとは（1931年生まれ）。

◇『天文学入門 星・銀河とわたしたち』
嶺重 慎・有本淳一 編著 岩波ジュニア新書 H1～

「わたしたちはなぜここにいるのだろうか」「わたしたちはいったいどこから来たのだろうか」という、即時的かつ根源的な問いに対して、天文学の立場からそれがどこまでわかってきたのかを答える。コンパクトにまとまって、記述も簡潔でわかりやすい。課題と解説もいっただろう。図・写真もいい。

あえて注文を付けるとすれば、中学・高校の理科副読本として使われる可能性が高い本なので、用語は教科書に合わせる（例えば“浸食”→“侵食”）とか、単位もSI単位系に（“太陽エネルギー1分間1cm²あたり8ジュール”→ $1.37 \times 10^3 \text{ J} \cdot \text{s}^{-1} \cdot \text{m}^{-2}$ ）など。

◇『ビッグバン宇宙論 上・下』 サイモン・シン著 青木薫訳 新潮社 H1～

天動説から地動説への転回からはじめ、ビッグバン宇宙に至る宇宙観の変遷をたどる。細かいエピソードも楽しい。ただし、最新の宇宙論までを解説するものではない。ビッグバン宇宙論の「正統派」解説本といった方がいいだろう。各章末には簡単な章のまとめもある。

イギリス人（インド系）が書いたためか、定常宇宙論のホイール（恒星の中での元素合成に大きなはたらき）に詳しいが、インフレーション宇宙論での佐藤勝彦氏には言及されていない（本文中で青木薫がコメントしているように）。

例により訳者が青木薫なので安心して読める。

◇『天の川の真実』 奥田治文・祖父江義明・小山勝二 誠文堂新光社 H1～

われわれの銀河（銀河系、天の川銀河）はどのような姿としているのだろうか。最近の観測技術の進歩によって、また他の銀河との比較によって、その中心部の姿・活動が垣間見られるようになってきた。どうも、そこには巨大ブラックホールがあり、また莫大なエネルギーを放出しているらしい。

また、銀河系の形も単純な渦巻きではなく、中心部（バルジ）から二本の腕（棒）がでて、そこから渦が始まっているようだ。また、太陽系は中心から2.8万光年ではなく、

2. 5 万光年という値が採用されている。P. 59 の図参照。

◇『宇宙の謎 65の発見の物語』

ポール・マーティン 富長星訳 岩波書店 H1～

宇宙について「知られている」ことについて、そのことを誰がいつ発見したかをまとめた本。豪華本だが図書館にある。

◇『ベテルギウスの超新星爆発』 野本陽代 幻冬舎新書 H1～

超新星爆発が近いというベテルギウス。ベテルギウスの解説から超新星爆発一般の解説、さらには恒星の一生、宇宙の解説へ。

生きていうちに、ベテルギウスが超新星爆発を起こすだろうか。

【環境】

◇『よくわかる地球温暖化問題 新版』 気候ネットワーク 中央法規 H1～

地球温暖化をいかに回避するか、とくにその主原因と考えられる二酸化炭素の排出をいかに抑えるかが書かれている。二酸化炭素排出の削減を個人レベル・企業レベル・政府レベル、さらに国際間でどのようなことができるか、どのようなことが課題なのかがまとめられている。

◇『砂漠化ってなんだろう』 根本正之 岩波ジュニア新書 H1～

そもそも砂漠とは何か、本当に広がっているのか（毎年九州+四国の面積が砂漠化しているのは本当か）などからはじまり、土地の荒廃（足尾鉾山跡地など）も考える。

また、砂漠緑化と砂漠化した土地の緑化はまったく違うことを力説する。

科学一般

◇『ビヨンド・エジソン 12人の博士が見つめる未来』

最相葉月 ポプラ文庫 M～H

ノンフィクション作家として数々の賞を受賞している著者が、興味深い研究をしている12人の科学者を取材し、それぞれの研究との出会い、困難、喜び、生き様などを描く。登場する研究者がとても魅力的で、研究者ってやっぱりカッコ良いな、と思える一冊。12人の研究者が自身の人生に影響を与えた本を一冊ずつあげているので、そこからまた、新しい本との出会いがあるかもしれない。

◇『科学に魅せられた日本人』 吉原賢二 岩波ジュニア新書 M1～

世界的な業績を上げた、でもノーベル賞はもらっていない日本人学者たちを物理学から2名、医学・生物学から6名、エレクトロニクスから2名選び、さらにコラムの形で化学、物理から2名の学者を取り上げて、その生い立ち・業績を解説している。

その中には麻布学園の理事長を勤めた（1974年度～1981年度）こともあるコムギの木原均氏も含まれている。学者としてばかりか、スポーツマン、冒険家・探検家としても一流だった氏（麻布OBでもある）の話は麻布生には興味深いだろう。

◇『理科がおもしろくなる12話』 山口邦夫 岩波ジュニア新書 M1～

I. 科学の歴史 II. 私たちと最先端の化学 III. 「環境の時代」の中で、という三つの柱の中からそれぞれ4つの話題をとりあげて解説している。すべてに對し、「もっと知りたい人のためのブックガイド」もついている。ただし、その中には現在絶版中のものもある。

◇『プレートテクトニクスの拒絶と受容』 泊次郎 東京大学出版会 M3～

なぜ、日本の地質学界はプレートテクトニクスに対して、否定的な態度をとり続けたのか（とり続けることができたのか）。この本はそれを実証的に解き明かしてくれる。「科学」は決して超越的なものではなく社会や歴史に翻弄されることがわかる。

◇『科学コミュニケーション』 岸田一隆 平凡社新書 H1～

世の「理科教室」「科学教室」は、（目を惹く実験を手がかり・足がかりにして）“科学のおもしろさ”を伝えようとしているように見える。でも、自分で面白いと思っても、他の人は面白くないかもしれない。また、一時的にある実験・現象とその解説が面白いと思っても、“体系”が面白いと思うわけではない。その乖離をまず自覚しないと、科学は伝わらないと思う。

◇『ものの大きさ』 須藤靖 東京大学出版会 H1～

なぜそれぞれのものは、それぞれの大きさを持っているのだろう。それは究極的には、なぜこの宇宙にこのわれわれが存在しているのだろう（存在できたのだろう）という疑問につながる。

宇宙は非常に微妙なバランスの大きさである定数（重力、電磁気力、光速など）の上に成り立っている。逆にいえばそうしたバランスのもとで、われわれが存在できている。もしかすると宇宙は沢山あって（マルチバース）、たまたまうまく定数の組み合わせできているこの宇宙だからこそわれわれがいるという考えもある。

この本は、うっかりすると怪しい領域に入ってきそうな話題を、現代の科学からきちんと見直そうとするものである。

コラムみたいな脚注が楽しい。例えば晩年のエディントンの講演を聴いた学生が、指導

教官に、「物理学者は年をとるとみんなあんな風におかしくなってしまうのでしょうか。」ときいたら、その指導教官は「エディントンは天才だからあんなった。君は心配ない。」と答えた話など。

また、この本で「無量大数」以上の教え方あることも知った。「不可説不可説転」は10の (7×2^{122}) 乗とか。

◇『朽ちていった命』 日本放送協会 新潮文庫 H1～

NHKスペシャルで放映された(2001年5月13日)の内容が、単行本になった。

事故そのものについての評価はおいておく。すさまじい病状。すべての組織の細胞の遺伝子が完全に破壊されてしまった。つまり、すでにある細胞が更新できない。例えば皮膚。入院したときは正常に見えた部分もダメになっていた。皮膚がなくなれば体液を保持できない。いくら補給しても追いつかなくなる。腸壁も壊れる。人間を内部から破壊する放射線。ただ、心臓の細胞だけは無傷であった。

治療チームのリーダー前川医師「原子力防災の施策のなかで、人命軽視がはなはだしい。現場の人間として、いらだちを感じている。責任ある立場の方々の猛省を促したい。」

※もう一人の被爆者も211日後に亡くなった。

◇『水俣学講義』 原田正純編著 日本評論者 H1～

熊本学園大学2002年後期に行われた水俣学の講義録である。講師陣は原田氏を始め、70年代に反公害運動を引っばった宇井純氏、チツソの第一組合委員長だった山下善寛氏、水俣の写真でデビューした桑原史成氏、地元熊本日日新聞で長く水俣病を追ってきた高峰武氏、法の面から裁判を支援した富樫貞夫氏、エリートの道を捨て水俣病を追っているもとNHKアナウンサーの宮澤信雄氏、ゴカイを研究している佐藤正典氏、被害者の濱元二徳氏、経済学の花田昌宣・酒巻政章氏という豪華講師陣。

講師陣からもわかるように、さまざまな角度から水俣病に迫る。講義録であるのでわかりやすいし、單元ごとにある程度完結しているので読みやすい。

そして皆が強調していることは、「水俣病は終わっていない」ということである。実際世界でも繰り返したような被害者が出ている。もちろん、それぞれの程度は違うし、無機水銀の中毒もある。だが、行政の無責任は日本ばかりではないようだ。残念なことにこれは世界に共通している。そして原田氏が悔やんでならないことは、「水俣病認定の基準」が典型的な重症患者の症状に準拠しているということである。政府間の問い合わせには、原田氏は出してもらえない。そうした悔しさも伝わってくる。

もう一つ、患者に対する補償は建前上チツソが行うことになっているわけだが、実際は県を通じて国が行っていることも明らかにする。

◇『疑似科学入門』 池内了 岩波新書 H1～

筆者も書いているように、疑似科学は人の心のひだに入り込むものが多いので、廃れることはないだろう。私は現在巷に流れる「地震予知」は疑似科学（以前）と思っているが、「予防措置原則」を無原則に受け入れると、誰かが予知した日はそれなりの対応をとった方がいいことになってしまう。

「すべてを疑う」ということが正しいとしても、定説のすべてを疑って全部を個人が再検証することは不可能だし。

また、疑似科学だけではなく、疑似社会学・疑似歴史学（「新しい歴史教科書」など）もある。

この本では、「二酸化炭素」＝絶対悪、「リサイクル」＝やってはいけないなどの極論も批判している。

最終的には「バランス」なのだろう。でも、どうやってバランス感覚を養えばよいのか。まず中学・高校において、すべての教科・科目の内容を理解することが第一歩かもしれない。

◇『なぜ人はニセ科学を信じるのか』

マイケル・シャーマー 早川書房 H1～

副題の「UFO、カルト、心霊、超能力のウソ」より、進化論否定論や、ホロコースト否定論を逆の立場から解説している部分が多い。アメリカの一部の州では、公立学校において進化論を教えるはいけない時代が、つい先頃まで（1987年まで）続いていたのだ。このへんはキリスト教の伝統がない日本ではピンとこないかもしれない。だが、ホロコースト（ナチによるユダヤ人大虐殺）否定論の方は、いわゆる自由主義史観の一部の人たちの議論の組み立てと同じで、アメリカにもやはりこういう人たちがいる、どこも同じなんだなあという感じがする。

「ニセ科学」に科学的に反論するだけでなく、表題通り「なぜ人はそういうものを信じてしまうのか」という面の考察にも力を入れている。

◇『成長の限界 人類の選択』

ドネラ・H・メドウズ デニス・L・メドウズ ヨルゲン・ランダース 枝廣淳子訳 ダイヤモンド社 H2～

1972年に出版された『成長の限界』（同じ著者、ダイヤモンド社）の、2回目の全面改訂版である。『成長の限界』にはいろいろな批判があった。だが、人類の未来を「見える」形で表し、警告を発した意義は大きかったのではないかと。今回も、シナリオ0からシナリオ10までを提示している。

従来からある批判、こうした問題に対しコンピュータ・シミュレーション（※）は有効かとか、あるいはこんなことはいちいちシミュレーションするまでもなくわかりきったことだから、それよりもどうやってその危機を回避するか、その具体策を考える方が重要だ

という批判に答えようとしている。だがやはり、「入手可能な再生不可能な資源がより多く、汚染除去、土地の収穫率改善、土地浸食軽減、そして資源の効率改善の技術」（シナリオ6）に加え、「2002年から人口と工業生産を安定させる」（シナリオ9）といわれても、ではどうやって？という疑問が出るのは当然だろう。

もう一つの批判、いわゆる南北問題（貧富の格差）が考慮されていないという点については、新しくなったコンピュータ・モデルの中には取り込まれておらず、本文の中で扱われている。これとも関連するが、「接続可能な社会」のイメージもつかみにくい。「現在の世界が成長を妨げられたときに…」との違いが明確でない。

しかし、この本を全体で主張している人類のエコロジカル・フットプリント（自然・地球環境に対するダメージ）をできるだけ減らしていこうという姿勢には、反対できるわけではない。たしかに、具体策は抽象的な（というそもそも矛盾）第8章を考えるしかないか。

（※）『成長の限界』のときは、1つのシナリオの計算は大型コンピュータで10分～15分かかったという。この本を書いたときは、1つのシナリオの計算はラップトップ・コンピュータで4秒だそうだ。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
ご冗談でしょうファインマンさん (上・下)	ファインマン	岩波書店	M1～
物理法則はいかに発見されたか	〃	ダイヤモンド社	〃
自然界における左と右 (新版)	マーチン・ガードナー	紀伊国屋書店	〃

情報

◇『情報を捨てる技術』 諏訪邦夫 講談社 M1～

あふれる情報から必要なものを、選び出すには、まず必要のないものから捨てていく。出来そうで出来ないのが現実です。集めた情報を使う努力からバランスの良い情報量が決まってくる…。

◇『コンピュータシステムの基礎』

アイテック情報技術教育研究所 アイテック情報技術教育センター M1～

コンピュータシステムの全体観、現代社会との接点、歴史、基礎事項を踏まえ、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク、システムの信頼性、開発などを学ぶのに適しています。情報処理技術者試験にも対応。

◇『初めて学ぶ基礎ロボット工学』

小川 鉦一、加藤 了三 東京電機大学出版局 M1～

ロボットとは何かから、ロボットの構造・機能、動かす方法など、ロボットをこれから学ぼうという人にロボット工学の概要を、実際に創り動かすという視点からわかりやすく解説しています。ロボットに興味のある生徒向け。

◇『考える脳考えるコンピューター』

ジェフ・ホーキンス、サンドラ・ブレイクスリー ランダムハウス講談社 M1～

米パール・コンピューティングの創業者であり、モバイル業界のビジョナリストである著者が、もう一つの本業である人工知能の研究について綴っている。ノイマン型コンピュータに基づく従来の人工知能や、脳の働きを単純な神経細胞の連鎖に還元するニュートラル・ネットワークの理論を否定している興味深い1冊です。

◇『キーワードで理解する最新情報リテラシー』

久野 靖、辰己 丈夫、佐藤 義弘 (著) 日経BP ソフトプレス M3～

IT 分野が苦手だという人にもわかりやすく、キーワードをコンパクトに解説したハンドブック。使う技術よりも、使うための環境や心構えなどの常識に重みが置かれている。特に「ネットの脅威とセキュリティ」「情報倫理とルール」は、自分を守るための最低限の常識が学べる。Facebook やスマートフォンのような最新のトピック、個人認証やフィッシングなどの利用上の注意点、ネットワークやコンピュータの基礎知識など、情報社会を生きるために必要な幅広いトピックを取り上げている。

◇『NHKスペシャル 世界ゲーム革命』 NHK取材班 NHK出版 M3～

進化し続ける「ゲーム」がもたらす衝撃の未来とは？巨大産業に変貌しつつあるゲーム開発。かつては「日本のお家芸」とまでいわれたが、いまや国策としてゲーム産業を推し進めるカナダやアメリカに大きくおくれをとっている。巻き返しはなるのか。日本の天才ゲーム・クリエイターや北米のゲーム関連企業の最前線を追い、コンピュータ・サイエンスと連動するゲームの可能性と衝撃の未来像を探る。

◇『頭のいい人が変えた10の世界 著者』

NHK ITホワイトボックス 講談社 M3～

現代社会に影響を与える主な IT 技術を10個とり上げてわかりやすく説明している。ソーシャルメディア、テレビの未来、自動車事故がなくなる、東日本大震災でのソーシャルネットワーク、これからの5、10年先にどうなるかなど興味ある話題を展開している。

◇『iMindMap ではじめるマインドマップ』 伊藤賢 インプレスジャパン M3～

マインドマップは、記憶、学習、プレゼンテーション、セルフマネジメント、企業のマネジメントなどに幅広く活用されている。「学びの兵器」として、韓国、中国では教育にマインドマップを適用している。様々な実践ワークを通じて習得できるようコンピュータ上でマインドマップを実施できるソフトウェアもついている。

◇『ゲームニクスとは何か―日本初、世界基準のものづくり』

サイトウアキヒロ 幻冬舎新書 M3～

著者はかつて任天堂でゲームソフト開発を取り仕切り、現在は立命館大学で教鞭をとる。日本のビデオゲームが世界を席卷した理由を、和のもてなしの心であるとする（任天堂は京都の玩具メーカー）。その考え方をゲーム開発の基本理論としてまとめたのがゲームニクスである。具体的には直感的な操作性、マニュアルレス、ユーザが「はまる」演出、段階的習熟、バーチャルとリアルな接続など。このような卓越したユーザインタフェース―ユーザにその存在を意識させないほどの―は、円高と新興国の追い上げに苦悩する日本の製造業に活かすことができる、という展望が示される。

◇『頭のいい人が考えたすごい「仕組み」』

NHK ITホワイトボックス 講談社 H

現代社会の代表的な IT 技術のキーワードを説明している。クラウド、スパコン、インターフェース、流通、小売り、医療のからくり、携帯はどのように進化するかに関して分かりやすく説明している。

◇『大学生のためのレポート・論文術』 小笠原喜康 講談社現代新書 H

レポートや論文を書くときのルールや文献検索方法などの基本的な事柄についてわかりやすく説明しています。そのため、高校生である皆さんがレポートや論文を書くときに、とても参考になる本です。レポートの質を高めたいと思う人はぜひ読んでみてください。

◇『20代でやっておきたいこと』 川北義則 三益書房 H

20代の読書量で人生は決まる、ライバルはあなたの宝物、叱られることに強くなる、欠点はあったほうがよい等、20代の若者に向けて助言をしています。30代になってこの本を知った私は、20代でやり残したことを振り返りもう少し早く知っていればと後悔した本です。

◇『編集デザインの教科書』 工藤 強勝（監修） 日経デザイン H1～

就職市場で依然人気のある、出版や広告業界。編集、デザインから出版されるまでの流れを、広く浅く業界知識を知ることができる入門書。出版業界に興味が少しでもあるとい

う人に向けて、文字やレイアウト、ページの役割、エディトリアルデザインの基本的な考え方など、「本のしくみ」を基礎の基礎からやさしく解説。また取材や編集の技術から、予算管理、広告戦略、書籍流通のしくみまで、プロとして知っておくべき知識も網羅し、すでに出版の仕事に従事する人にもためになる一冊である。

◇『はじめてのPHP言語プログラミング入門』

大恒靖男 技術評論社 H1～

Web アプリケーション構築ツールとして PHP を取り上げた書籍の中でも数少ないプログラミング言語として PHP を解説することに最も重点を置いた入門書です。本格的なアプリケーション構築に必要な基礎知識を習得することができます。

◇『IT時代の震災と核被害』

コンピューテクノロジ編悠部 インプレスジャパン H1～

3.11の東日本震災時に、ヤフー・ツイッター・アマゾンなどのインターネット業界はどのような対応をしたか、どんなことが起こったかをレポートしている。これからの日本、社会、メディアをどうすべきかを考えるきっかけを与える様々な提言があり、今後の時代をどのようにすべきかを考えさせられる。

◇『ウェブユーザビリティの法則』

スティーブ・クルーグ (著)、中野 恵美子 (翻訳) ソフトバンククリエイティブ H2～

使いやすいウェブを作るための常識を書いた一冊。ユーザーを悩ませず、惹きつけるページ作りをすることがユーザビリティの第一歩である。ユーザーの行動を理解して、使いやすいウェブサイトを作るためのプロのノウハウが述べられている。世界的に有名な著書で、プロ、アマ問わず、ユーザーを重視したウェブサイトづくりを志している人は必読だと言われている。本書自体、ユーザビリティの考えに基づいて書かれ、内容も要点を絞って書いてあり、要点がすぐに理解できる。ユーザビリティを学んで、使いやすくて分かりやすいホームページとは何かを知ることができる一冊である。

◇『つながりすぎた世界』 ウイリアムHダビドウ ダイアモンド社 H2～

バブル、経済破綻、個人情報流出、政治波乱・・・などの小さなきっかけが一国をゆるがす大問題へと発展しかねない。最もつながりやすい世界を私たちはどう生き抜くべきかを提言している。

◇『LATEX はじめの一步』 土屋勝 カットシステム H2～

論文や各種の文書をパソコンできれいに書くときに LATEX は、非常にすぐれたツールである。世界中で使われているので、興味ある人は、この本で LATEX はどんなものかを知る

ことができる。

◇『シンプルプレゼン』 ガー・レイノルズ 日経 BP 社 H2～

米グーグル、マイクロソフト、スタンフォード大学、英オックスフォード大学など世界中で有名なプレゼン講師ガー・レイノルズ氏による「伝説の講義」を DVD に収めてある。DVD を見てから本で整理する構成になっている。禅との融合を図ったプレゼン手法は非常にユニークであるが大変にためになる内容である。ガー・レイノルズは、日本の禅の考え方をとりいれて成功を収めている。大学生以上が対象であるが、わかりやすく、これからプレゼンが重要になる社会に向けて高校生が見てもためになる内容である。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
著作権の考え方	岡本 薫	岩波新書	M3～
マルチメディアと著作権	中山 信弘	〃	〃
理系のための PowerPoint 「超」 入門	石居 進	ブルーバックス CD-ROM	〃
コンピュータはなぜ動くのか	矢沢 久雄	日経 B P 社	M3
プログラムはなぜ動くのか	〃	〃	〃
Windows はなぜ動くのか	天野 司	〃	〃
ネットワークはなぜつながるのか	戸根 勤	〃	〃
新・学問のすすめ	鷲田 小彌太	マガジンハウス	M～H
—超・情報化社会の知の活用術美術			

美術

◇『花鳥・山水画を読み解く—中国絵画の意味』

宮崎法子 角川書店 M～H

山水画には隠逸を理想とする文人士大夫の憧れが、花鳥画には庶民の現世の幸福への願いが吉祥句とともに織り込まれていた、宋代以降の山水・花鳥画に込められた中国絵画のさまざまな画題に分け入りそこに込められた寓意と社会背景を読み解く一冊。

◇『奇想の系譜』 辻 惟雄 ちくま学芸文庫 M～H

近世絵画史において傍系とされ、奇矯で幻想的な絵を描いた岩佐又兵衛、狩野山雪、伊藤若冲、蘇我蕭白、長沢蘆雪、歌川国芳らを「奇想」という言葉で定義して、異端ではなく主流の中での前衛と再評価する。昨今話題の展覧会企画に影響を与えている著書。

◇『<日本美術>誕生 近代日本の「ことば」と戦略』

佐藤道信 講談社選書メチエ M~H

やまと絵、浮世絵、水墨画……。なぜ「絵」と「画」が使い分けられているのか。明治初期、西洋化の波のなかで「絵画」という語が成立したのはなぜか。日本美術の誕生・創出を「ことば」から探る美術史。

◇『Vitamin P:New Perspectives In Painting』

Barry Schwabsky 著 PHAIDON M~H

世界各地の信頼される批評家、キュレーター、その他の専門家の推薦による、現代を代表する画家114人を収録した作品集。現代絵画の多様性を知るうえで参考になるはずだ。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
あたらしい教科書(6) 広告	天野 祐吉	ブチグラフィック	M~H
「縮み」志向の日本人	李 御寧	講談社学術文庫	〃
芸術闘争論	村上 隆	幻冬舎	〃
デザインのデザイン	原 研哉	岩波書店	〃
余白の芸術	李 禹煥	みすず書房	M3~
不完全な現実	藤幡 正樹	NTT出版	〃
芸術美の哲学	熊谷 直男	春秋社	H1~
美術になにが起こったか	榎木 野衣	国書刊行会	〃
芸術をめぐる言葉	谷川 渥	美術出版社	H3
アートとコンピュータ 新しい美術の射程	藤幡 正樹	慶応義塾大学出版会	〃

書道

◇『白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい』、『白川静さんに学ぶ 漢字は怖い』

小山鉄郎 著 共同通信社 M1~

『漢字は楽しい』は、白川静さんに著者が22の漢字を取りあげ、それをめぐる漢字についてわかりやすく教えてもらった本です。「犬」をめぐる漢字では古代から人間と密接な関わりがあった動物であることを再認識するでしょう。イラスト付きでどこから読み進めても楽しい構成になっています。続編の『漢字は怖い』もお薦めです。

◇『神さまがくれた漢字たち』 監修 白川 静 著者 山本史也 理論社 M1～
『続・神さまがくれた漢字たち 古代の音』著者 山本史也 理論社 M1～
“よしみちパン!セ”シリーズの2冊です。白川静の漢字学を著者が内容をしぼり、わかりやすく説明しています。漢字の成り立ちを古代人の生活と意識にまでふみこんでいく白川文字学の入門書としても貴重なものです。全文ルビつき、2色刷り。

◇『部首のなはし／部首のはなし2』 阿辻哲次 中公新書 M1～
副題の“漢字を解剖する”の通り、部首を1つずつ取りあげ、その字源を解説しています。部首の分類方法にもあらためて気づかされることが多く、どの項も著者の人柄があらわれたエッセイ風にまとめられていて親しみやすい1冊です。

◇『古代文字練習帳』 文字文化研究所 筑摩書房 M1～
300年前の中国殷代に創られた甲骨文字は、古代中国に生きた人々の高い叡智と豊かな感性の結晶といえるでしょう。このような甲骨文字をなぞることで、人類史上たぐいまれな表意文字の世界に遊んでみましょう。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
漢字の常識、非常識	加納喜光	講談社現代新書	M～H
マンガ 書の歴史(殷～唐)	魚住和晃編著	講談社	〃
〃 (宋～民国)	〃	〃	〃
電腦文化と漢字のゆくえ	平凡社編	平凡社	〃
字源物語／続字源物語	加藤道理	明治書院	M1～
『常用字解』	白川静	平凡社	〃
人名字解	白川静、津崎幸博	〃	〃
現代作家100人の字	石川九楊	新潮文庫	H1～H3
古代文字書道入門	楠木美樹	芸術新聞社	〃
精萃図説書法論	漢魏六朝	西東書房	〃
同上	唐	〃	〃
同上	宋	〃	〃
同上	元	西東書房	〃
同上	清 1, 2, 3 卷	〃	〃
古代を考える・唐と日本	池田温編	吉川弘文館	〃
中国古文学と殷周文化	松丸道雄他	東方書店	〃
漢字百話	白川静	中央公論社	〃

書名	編著者	発行者	学年
日本人の美意識	ドナルド・キーン	中央公論社	H1～H3
中国古代の文化	白川 静	講談社学術文庫	〃
書について	田辺 萬平	日本習字普及協会	〃
中国の哲学、宗教、芸術	福永 光司	人文書院	〃
書とはどういう芸術か	石川 九楊	中央公論社	〃
文字の現在、書の現在	〃	芸術新聞社	〃
中國書史	〃	京都大学学術出版会	〃
日本書史	石川 九楊	京都大学学術出版会	H1～H3
図説漢字の歴史	阿辻 哲次	大修館	M3
漢字遊心	白川 静	平凡社	H2
漢字の知恵	遠藤 哲夫	講談社	M1～M3
漢字の字源	阿辻 哲次	〃	〃

音 楽

◇『ショパンの生涯』 B. スモリカ=ジェリカ 音楽之友社 M～H

ポーランド人研究者によるポーランド語による本格的ショパンの伝記である。収録されている日記や手紙なども興味深く、曲が作られた背景なども改めてよく解ることも多い。図版も豊富でショパンの全体像を知る上では好著である。

◇『拍手のルール - 秘伝クラシック鑑賞術』 茂木大輔 中央公論新社 M～H

NHK 交響楽団の首席オーボエ奏者である茂木大輔氏による音楽エッセイ集。テンポの良い語り口と、あちこちに散りばめられたエピソードの面白さで、読んでいて純粋に楽しめる。少し前に大ヒットした『のだめカンタービレ』の音楽監修も務める同氏ならではの気の利いた切り口で、クラシックに興味のある人にはもちろん、興味はあるけどあまり詳しくは・・・という人にこそおすすめ。

◇『美学への招待』 佐々木健一 中央公論新社 H

いわゆる「男の美学」といった意味ではなく、芸術哲学としての「美学」への入門書。やや保守的な視点と感じられる部分もあるが、「美とは何か」といった大きな問いから、「トイレをひっくり返しただけのものがなぜ芸術といえるのか」といった素朴な疑問にも答えてくれる。音楽を含むあらゆる芸術に関わる内容で、深く思想して「知的好奇心」を刺激する楽しみを大いに感じてもらえる一冊だと思う。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
大作曲家が語る音楽の創造と靈感	アーサー・M・エープル(著) 吉田幸弘(訳)	ブック・クラブ	M~H
回想 音楽の街 私のモスクワ	小野光子	朔北社	〃
スペイン音楽のたのしみ	浜田滋郎	音楽之友社	〃
リヒテルは語る	ユーリー・ボリソフ	〃	〃
バロック音楽のたのしみ	服部幸三	共同通信社	〃
バッハからの贈りもの	鈴木雅明	春秋社	〃
エル・フォルクローレ	浜田滋郎	晶文社	〃
フランス六人組	エヴリソ・ユラル＝ヴィタル	〃	〃
20年代パリ音楽家群像			
グレン・グールド	ジェフリー・ヘンサレット	音楽之友社	〃
—なぜコンサートを開かないか—			
カール・ベーム	フランツ・エンドラー	新潮社	〃
ルービンシュタイン自伝	木村博江 訳	共同通信社	〃
—神に愛されたピアニスト—			
メンデルスゾーン家の人々	ハーバート・クッファハーグ	東京創元社	〃
—三代のユダヤ人—			
中世・ルネッサンスの社会と音楽	今谷和穂	音楽之友社	〃
マーラー頌	酒田健一 編	白水社	〃
主題と変奏—ブルーノ・ワルター—	内垣啓一 訳	〃	〃
音と言葉	フェルトヴェングラー	〃	〃
音楽ノート	フェルトヴェングラー	〃	〃
異邦人マーラー	ヘンリー・A・リー	音楽之友社	〃
人間と音楽	イエフディ・メニューイン	白水社	〃
メニューインが語る	カーティス・W・ディヴィス	日本放送出版協会	〃
弦によせて	J. シゲッティ	音楽之友社	〃
ヘルマン・ヘッセと音楽	F. ミヒェルス	音楽之友社	〃
聖書の音楽家バッハ	杉山好	〃	〃
ドビュッシー	ステファン・ヤロチニスキ	〃	〃
—印象主義と象徴主義—			
バロック音楽の楽しみ	服部幸三	共同通信社	〃
ホロヴィッツ	グレン・プラスキン	〃	〃
モーツアルトの手紙	吉田秀和 編 訳	講談社	〃
モーツアルト	メーナート・ソロモン	新書館	〃

書名	編著者	発行者	学年
モーツアルトは宇宙	海老沢 敏	音楽之友社	M~H
少年モーツアルトの旅	石井 宏	〃	〃
モーツアルト 二つの顔	磯山 雅	講談社	〃
小泉文夫・フィールドワーク ーヒトはなぜ歌をうたうのかー	小泉 文夫	冬樹社	〃
民族音楽の世界	小泉 文夫	日本放送出版	〃
カザルスとの対話	コレドール	白水社	〃
ブレンナー峠を越えて ーヨーロッパ芸術の光と影ー	小塩 節	音楽之友社	〃
バッハ家の音楽家たち	パッシー・M・ヤング	白水社	〃
カラヤンー栄光の裏側にー	ロバート・C・ヤング	音楽之友社	〃
評伝ーチェリビダッケー	クラウド・ヴァイラー	春秋社	〃
丸山真男・音楽の対話	中野 雄	文春新書	〃
ワーグナーとは何か	B・マギー	音楽之友社	〃
天才と狂気	霜山 徳爾	学樹書院	〃
愛唱歌ものがたり	読売新聞社文化部	岩波書店	〃
唱歌・童謡ものがたり	読売新聞社文化部	岩波書店	〃
「歓喜に寄せて」の物語	矢羽 々 崇	現代書館	〃
シラーとベートーヴェンの「第九」			
西洋音楽史ー「クラシック」の黄昏ー	岡田 暁 生	中公新書	〃
現代音楽を語る	小倉 朗	岩波新書	H
君の微笑み エツトレ・バステリアニーニ	マリナ・ホアネヨ、ジルベル ト・スタローネ著 辻昌宏訳	フリースペース	〃
わが敵 マリア・カラス	マリア・ディ・ステファノ、フランカ マリア・トラバーハニ著	新書館	〃
空耳の科学	柏野 牧 夫	ヤマミュージックメディア	〃
音楽の科学	フィリップ・ボール	河出書房新社	〃
バルトーク晩年の悲劇	アガサ・ファセット	みすず書房	〃

【聴いておきたい曲】

作曲家	曲名
ヴィバルディ	合奏協奏曲「四季」Op. 8-1~4
バッハ	オルガン曲：「小フーガ ト短調」BWV578 「トッカータとフーガ ニ短調」BWV565 「パッサカリア ハ短調」BWV582 無伴奏バイオリン：パルティータ第2番 BWV1004より「シャコンヌ」

バッハ	マタイ受難曲 BWV244
ヘンデル	オラトリオ「メサイア」HWV56 リコーダー・ソナタ Op. 1-7、1-11
ハイドン	交響曲：第94番「驚愕」、第100番「軍隊」 第104番「ロンドン」 弦楽四重奏曲：Op. 64-5「ひばり」、Op. 76-3「皇帝」
モーツァルト	交響曲：第29番 K201、第40番 K550、第41番「ジュピター」K551 ピアノソナタ：第11番 K331「トルコ行進曲」付、第13番 K333 レクイエム K626 オペラ「フィガロの結婚」K492
ベートーヴェン	交響曲：第3番「英雄」Op. 55、第5番「運命」Op. 67 第6番「田園」Op. 68、第7番 Op. 92 第9番「合唱」Op. 125 バイオリン協奏曲 Op. 61 ピアノソナタ：第8番「悲愴」Op. 13 第21番「ワルトシュタイン」Op. 53 第23番「熱情」Op. 57 弦楽四重奏曲：第14番 Op. 131、第15番 Op. 132
ロッシーニ	オペラ「セヴィリアの理髪師」
シューベルト	歌曲集「冬の旅」D. 911 交響曲：第7番「未完成」D. 759、第8番「グレート」D. 944 ピアノ五重奏曲「ます」D. 667 弦楽四重奏曲第14番「死と乙女」D. 810 ピアノソナタ第21番 変ロ長調 D. 960 4つの即興曲 D. 899および D. 935
ベルリオーズ	幻想交響曲 Op. 14
メンデルスゾーン	バイオリン協奏曲 Op. 64 交響曲：第3番「スコットランド」Op. 56 第4番「イタリア」Op. 90 「真夏の夜の夢」Op. 21および Op. 61
シューマン	交響曲：第1番「春」Op. 38、第4番 Op. 120 ピアノ曲：「子供の情景」Op. 15、「幻想曲」Op. 17 歌曲集「詩人の恋」Op. 48
ショパン	バラード：第1番 Op. 23、第4番 Op. 52 ポロネーズ：Op. 40-1「軍隊」、Op. 53「英雄」、Op. 61「幻想」 12の練習曲 Op. 10および Op. 25 スケルツォ第2番 Op. 31 夜想曲：第1番 Op. 9-1、第2番 Op. 9-2
リスト	交響詩「前奏曲」S. 97 超絶技巧練習曲 S. 139
ヴェルディ	オペラ：「アイーダ」、「オテロ」
ワーグナー	楽劇：「ニュルンベルグのマイスタージンガー」より前奏曲 「トリスタンとイゾルデ」より「前奏曲」「愛と死」 オペラ「タンホイザー」序曲

フランク	バイオリンソナタ イ長調 交響曲 ニ短調
スメタナ	連作交響詩「わが祖国」
ブルックナー	交響曲：第4番、第5番、第8番、第9番
ヨハン・シュトラウスⅡ	ワルツ：「美しく青きドナウ」Op. 314、「春の声」Op. 410 オペレッタ「こうもり」序曲 ポルカ「雷鳴と電光」Op. 324
ヨーゼフ・シュトラウス	ポルカ「かじ屋のポルカ」
ブラームス	交響曲：第1番 Op. 68、第4番 Op. 98 バイオリン協奏曲 Op. 77 ピアノ曲：3つの間奏曲 Op. 117 ドイツ・レクイエム Op. 45
サン＝サーンス	交響曲第3番「オルガン付き」Op. 78 バイオリン曲：「序奏とロンド・カプリチオーソ」Op. 28 チェロ協奏曲第1番 Op. 33
ビゼー	オペラ「カルメン」 「アルルの女」組曲
ムソルグスキー	組曲「展覧会の絵」：ピアノ独奏版、管弦楽版（ラヴェル編曲） オペラ：「ボリス・ゴドゥノフ」
チャイコフスキー	交響曲：第4番 Op. 36、第5番 Op. 64、第6番 Op. 74「悲愴」 ピアノ協奏曲第1番 Op. 23 バイオリン協奏曲 Op. 35 バレエ音楽：「白鳥の湖」Op. 20、「くるみ割り人形」Op. 71 「眠りの森の美女」Op. 66 弦楽四重奏曲第1番 Op. 11 序曲「1812年」Op. 49
ドヴォルザーク	交響曲：第8番 Op. 88、第9番「新世界より」Op. 95
グリーグ	「ペールギュント」組曲 Op. 46および Op. 55 ピアノ協奏曲Op. 16
リムスキー＝コルサコフ	交響組曲「シェヘラザード」Op. 35
フォーレ	レクイエム Op.48
プッチーニ	オペラ：「蝶々夫人」、「トスカ」
マーラー	交響曲：第1番「巨人」、第2番「復活」、第4番「大地の歌」
ドビュッシー	ピアノ曲前奏曲集：第1巻、第2巻 交響詩「海」、「牧神の午後への前奏曲」
リヒャルト・シュトラウス	交響詩：「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」 「ツァラトストラはこう語った」 「英雄の生涯」、「ドン・キホーテ」 四つの最後の歌
ラフマニノフ	ピアノ協奏曲：第2番 Op. 18、第3番 Op. 30 パガニーニの主題による狂詩曲 Op. 43
ホルスト	組曲「惑星」Op. 32
ラヴェル	ピアノ曲：「鏡」、「マメール・ロワ」、「クーブランの墓」

ラヴェル	バレエ音楽「ダフニスとクロエ」第2組曲 ピアノ協奏曲 左手のためのピアノ協奏曲 管弦楽曲「スペイン狂詩曲」
バルトーク	弦楽器・打楽器・チェレスタのための音楽 Sz. 106 ルーマニア民俗舞曲 Sz. 68 ピアノ曲集「マイクロコスモス」Sz. 107
ストラヴィンスキー	バレエ音楽：「ペトルーシュカ」、「火の鳥」、「春の祭典」
プロコフィエフ	交響曲：第1番 Op. 25、第7番 Op. 131 バレエ音楽「ロメオとジュリエット」組曲 Op. 64 ピアノ・ソナタ第7番 Op. 83 交響的物語「ピーターと狼」Op. 67
ガーシュイン	「ラブソディー・イン・ブルー」
ショスタコーヴィチ	交響曲：第1番 Op. 10、第5番 Op. 47
メシアン	トゥランガリラ交響曲 ピアノ曲「鳥のカタログ」
ブリテン	青少年のための管弦楽入門 Op. 34 オペラ「ピーター・グライムス」Op. 33より「海の間奏曲」

技 術

◇ 『技術発達史』 門脇重道 山海堂 M1～

技術の発達の歴史について、わかりやすくまとめられた本です。第2部として、エネルギーと環境汚染の歴史についてもまとめられています。本書は、多くの技術史書が時代の流れに沿って技術史を記述しているのに対して、技術そのものの一貫性のある発達がわかりやすいものとするために、個別技術についての発達を述べる形式をとっています。具体的には、情報、動力、輸送、エネルギーなどの技術の発達史をとりあげています。本書は技術そのものの入門書として最適であると考えます。

◇ 『ローテクの最先端は実はハイテクよりずっとスゴイんです。』

赤池 学 ウェッジ M2～

「現代の名工」たちをはじめ、ジェット機やロケット、核融合炉、マイクロマシンなどの機器開発を「経験と勘」を主体としたアナログな技術で支えている企業と、そこで活躍する熟練工たちを取材したものである。「ナンバーワンの技術」と、世界最小の歯車製作のノウハウといった「オンリーワンの技術」を併せ持つ町工場の取材から、技術者たちの自信と誇りに満ちた姿は深い感銘を与えてくれる。「製造立国」、「技術立国」といわれた日本の底力を見せつける1冊である。

◇『ものづくり魂——この原点を忘れた企業は滅びる』

井深 大、柳下 要司郎 サンマーク出版 M2～

ソニーの創業者である井深大と盛田昭夫。本田の創業者である本田宗一郎。経営者である前に、一流の技術者であった今は亡き3人の偉人から、モノ作りの原点、技術者としてのあり方を知ることができる。知識を身につけるためには「見たり、聞いたり、試したり」の過程があるが、そのなかでも「試す」ことがないと、どうしても知識が知恵になっていかない。その意味では「試して失敗することのリスクよりも、失敗を恐れて試さないリスクのほうが大きい」。昨今は不況、情報過多で、試す機会も少なくなっている。生きる知恵を身に着けたいならば技術者以外でもぜひ読んでほしい一冊である。

◇『森の博物館』 稲本 正 オーク・ヴィレッジ M～H

本と呼べるのか分からないが、我々の身近にあった30種類の原物標本が付いたもので、それらの木がどのように使われて来たのか、手に取って読めるのが良い。

◇『エンジンABC』 檜垣和夫 講談社ブルーバックス M3～

エンジンと聞くと、すぐに自分では出来ないと思ってしまう人がいるが、エンジンとは何かを理解すれば、簡単に作ることの出来ることが分かるし、今問題になっている、排気ガスについても理解出来ます。

◇『やりたいことをやれ』 本田 宗一郎 PHP 研究所 H1～

世界の HONDA を創った本田宗一郎。あふれるばかりの人間の魅力があったと評される氏の、喜びと勇気を与えてくれる言葉の数々がちりばめられている自伝を交えての著書。「知識・学歴・金・肩書きは手段であって相手を思いやり好かれることが目的だ」、と書いてある。氏は中学を卒業し、丁稚奉公で就職したのち、独立した。将来に悲観したり、がんばってもなかなか認められないことにもし悩んでいるのであれば、これを読んでアプローチを変えたらどうだろうか。成功とは 99%の失敗に支えられた 1%であるという信条を説いた一冊である。

【その他】

書 名	編 著 者	発 行 者	学 年
たのしい手作り教室	産業教育研究連盟 編	民 衆 社	M
木工アイデア集	向山玉雄・諏訪義英	誠 文 堂 新 光 社	〃
法隆寺（世界最古の木造建築）	西岡常一・宮上茂隆	草 思 社	〃
遊びの博物館	坂 根 巖 夫	朝 日 新 聞 社	〃
原始人の技術に挑む	岩 城 正 夫	大 槻 書 店	〃

書名	編著者	発行者	学年
図解・アマチュアの工作技術	角 居 洋 司	C Q 出版	M
電気電子教室	鈴木 寿 雄	誠文堂新光社	〃
趣味の電子工作	吉 村 一 信	オ ー ム 社	〃
住まいの電器入門心得帖	関 孝 明	〃	〃
お父さんのための電気とメカの本	田 清	日本実業出版	〃
人間は何を作ってきたか	N H K 編	日本放送出版	M~H
人間と機械の話	S . リ リ 一	岩 波 書 店	〃
金属と人間の歴史	桶 谷 繁 雄	講 談 社	〃
鉄の語る日本の歴史 上・下	飯 田 賢 一	そしえて文庫	〃
工匠たちの知恵と工夫	西 和 夫	影 国 社	〃
江戸時代の大工たち		芸 術 出 版	〃
電子工作 I・II	橋 本 文 夫	廣 濟 社	〃
電子工作の話	佐 伯 平 二	技 報 堂 出 版	〃
この世はすべて泡だらけ	も り ひ ろ し	T O T O	〃
電子立国日本の自叙伝	相 田 洋	N H K 出 版	〃
建築・土木の雑学事典	大 浜 一 之	日本実業出版	〃

家 庭

◇『ヒューマン—なぜヒトは人間になれたのか—』

NHKスペシャル取材班 角川書店 M~H

自分のものなのに自分の思い通りにならない心。そんな「心」の中には壮大な人類の進化が埋まっている。本書は考古学に限らず、心理学、遺伝子学、経済学、脳科学から「人間とは何か」を見つめ、歴史のなかに心の進化を追いかける好著である。

【その他】

書名	編著者	発行者	学年
肥満と飢餓—世界フード・ビジネスの不幸のシステム	ラ ジ ・ パ テ ル	作 品 社	M~H
世界の半分が飢えるのはなぜ？	ジャン・ジクレール	合 同 出 版	〃
豊かさの条件	暉 峻 淑 子	岩 波 新 書	〃
沈黙の春	レイチェル・カーソン	新 潮 社	〃
プランB—人類文明を救うために—	レスター・ブラウン	ワールド・ウォッチ・ジャパン	〃

書名	編著者	発行者	学年
ハチはなぜ大量死したのか	ローワン・ジェイコブセン	文藝春秋	M~H
生命と食	福岡伸一	岩波ブックレット	〃
反貧困―「すべり台社会」からの脱出	湯浅誠	岩波新書	〃
ルポ貧困大国アメリカ	堤未果	〃	〃
生物と無生物のあいだ	福岡伸一	講談社現代新書	〃
原子力神話からの解放	高木仁三郎	光文社カップブックス	〃
「ルポ 子どもの貧困連鎖」	保坂渉	光文社	〃
「上野先生、勝手に死なれちゃ困ります」	池谷孝司	〃	〃
「サイレントウォー」	上野千鶴子	〃	〃
「平等社会」リチャード・ウィルキンソン	古市憲寿	講談社	〃
	今中哲二	講談社	〃
	ケイト・ピケット	東洋経済新報社	〃

体 育

◇『イチロー主義』 小川 勝 毎日新聞社 M~H

イチローこと、鈴木一郎選手は二十歳で正真正銘の伝説を残した。

1994年の210安打（打率・385）は日本のプロ野球が続く限り語り継がれるだろう。イチローの事を知りたい人は読んでみて下さい。

◇『最後のストライク』 津田 晃代 勁文社 M~H

津田恒美 甲子園に春・夏連続出場・エースとして活躍、広島東洋カープにドラフト1位指名で入団。球団史上初の最優秀新人賞受賞。優秀選手賞、日本シリーズ優秀選手賞 津田恒美の病気との闘いと野球人生が書かれています。

◇『4スタンス理論』 廣戸聡一 池田書店 M~H

練習や稽古に熱心に取り組むほど迷いが増えてしまう。そんな方はいませんか？

本書は、そんな悩みに応えるためにあります。いってみればこの本は、皆さんの身体の取り扱い説明書です。

◇最新 スポーツルール百科 鈴木一行 大修館 M~H

様々なスポーツのルールを知ろう！！

◇『レッシュ・トレーニング』 廣戸聡一 ベースボール・マガジン社 H

本書では「健康な身体」を最大の目標として、それぞれの人の現状と目的に合ったコンディショニングを、簡単なストレッチを中心に解説していきます。

健康、心、頭脳を若々しくよみがえらせたい。その願いを実現するのが本書です。

◇『心の聖地 スポーツ 闘いの記憶』 共同通信社 光波書店 H

2010年、ミズノ・スポーツライター賞受賞の住年のスター選手から競技を支える裏方までさまざまな形でスポーツに関わる人々が本書の主人公

書名	編著者	発行者	学年
北の海	井上靖	新潮文庫	M1～
ノムさんにドつかれる	竹下陽二	学習研究社	〃
復活のマウンドに命をかけて	荒木大輔	〃	〃
古田ののびのびID野球	古田敦也	〃	〃
ノムさんのひとりごと	飯沢恵之	日本放送出版協会	〃
川上哲治の座禅入門	川上哲治	ごま書房	〃
勝つためのイメージトレーニング法	前嶋孝	〃	〃
スポーツ選手の栄養と食事 —自宅ですべてできる—	スポーツ医・科学研究所	ベースボールマガジン社	〃
筋力アップエクササイズがわかる	森永製菓		〃

発行者 麻布学園 図書館部

発行日 2013 年 6 月 26 日